

平成26年度

# 研究活動報告



桜美林大学 加齢・発達研究所

## はじめに

桜美林大学加齢・発達研究所は、大学院老年学専攻の教育と研究を側面から支援することを目的として2002年に設立されました。研究所設立7年目を迎えた2008年4月から、老年学専攻は老年学研究科としてスタートすることになり、加齢・発達研究所は、その附置研究所として現在に至っています。

当研究所は、コミュニティが抱える高齢社会の課題解決を産・官・学の連携により推し進める発信基地として位置づけられており、専任教員を核に老年学研究の第一線で活躍している客員研究員に加えて大学院生を含めた共同研究体制を構築しながら、高齢者問題や高齢社会問題に寄与する若手研究者を育成し、日本だけでなく、アジアを中心とした各国のリーダーに育ちうる研究者・政策立案者・高度専門実務者を養成していくことが期待されています。

今年度の研究所組織は、老年学研究科の教授、特任教授6名の研究員に加えて、学外の客員研究員7名、さらには研究員と共同で研究を進める連携研究員23名で構成されています。

本報告書は、上記の研究メンバーによる2014年度の研究活動の概要、研究業績及び外部からの研究助成の獲得状況などについてまとめたものです。今年度も、高齢者のサクセスフル・エイジングを念頭においた、医学的、心理学的、社会・福祉学的側面からの課題解明に向けて多岐にわたる調査研究活動が展開されました。その成果を、論文、著書として刊行したほか、内外の学術集会において多数の発表がなされました。また、研究員の意欲的な研究活動が、文部科学省科研費をはじめとして多くの外部研究費の獲得につながっている様子が研究員諸氏の報告から伺えます。

今後とも加齢・発達研究所に対するご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

2015年3月

桜美林大学加齢・発達研究所

所 長 芳 賀 博

## 平成26年度 研究活動報告

### 研究員（常勤）研究活動報告

1) 芳賀 博	.....	1
2) 新野 直明	.....	5
3) 白澤 政和	.....	7
4) 杉澤 秀博	.....	15
5) 渡辺修一郎	.....	18
6) 直井 道子	.....	22

### 客員研究員研究活動報告

1) 植木 章三	.....	24
2) 上出 直人	.....	27
3) 澤岡 詩野	.....	30
4) 柴 喜崇	.....	32
5) 仙波由加里	.....	35
6) 中野いく子	.....	37
7) 兪今 (YU JIN)	.....	39

## 連携研究員研究活動報告

1) 青木 典子	41
2) 池田 晋平	42
3) 植田 拓也	43
4) 植田 大雅	44
5) 上野 佳代	45
6) 江川 賢一	47
7) 遠田 恵子	48
8) 皆田 良子	50
9) 川内 由加	51
10) 久喜美知子	52
11) 久米喜代美	54
12) 小林由美子	56
13) 高田 佳子	57
14) 東方 和子	59
15) 徳田 直子	60
16) 中辻 萬治	61
17) 平林 規好	63
18) 藤原 妙子	64
19) 堀内 裕子	65
20) 前田志名子	68
21) 松永 博子	70
22) 山岡 郁子	72
23) 吉田 綾子	73





## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーションに関する研究
- (2) 地域における介護予防推進に関する研究
- (3) 高齢者の介護予防および災害時支援に関する研究
- (4) その他

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーションに関する研究

住民との話し合いを通じて、地域社会における高齢者の役割を住民が主体的に見直すことにより、高齢者の社会参加を促進し、その効果を検証することを目的として、札幌市に隣接するO地区を対象として、2010年から介入を継続している。今年度は、これまでの介入の評価を行った。介入の経過評価を行う中で、様々な地域活動が創出されたが、その促進要因として「危機感の高まり」、「課題の共有」、「強力なリーダーシップ」、「コアメンバーの効力感の高まり」が抽出された。活動の阻害要因としては、「活動負担感」「住民間の確執」があげられた。また、3年間に及ぶ効果評価においては、介入の前後のアンケート調査で介入地区が対照地区に比べて「ボランティア活動」と「近隣とのコミュニケーション」が活発になっていることが示された。さらに、介入地区住民12名に対するグループインタビューによる質的分析から、3年間の取り組み終了後の効果として、「住民のつながりが深まった」「社会参加が促進された」「安全・安心な地域づくりが推進された」「環境美化が促進された」などの効果が抽出された。これらの成果は、アクションリサーチによる活動の評価として関連学会（日本老年社会科学会、日本応用老年学会、日本公衆衛生学会）にて発表した。

### (2) 地域における介護予防推進に関する研究

科研費による研究課題名「地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案」に関する2年目の計画を実行した。本研究は、地域の介護予防活動に関心のある中・高齢者を対象としたゼミナールを開講し、行政・地域包括支援センター等の研究者やゼミナール参加者とが双方向性・相互啓発性の高い討論（学習）を繰り返す中で、地域特性に応じた介護予防プログラムの提案を目指すものである。2014年度は、厚木市N地区において28名の参加希望者を対象として、2014年5月～2015年1月にかけて10回のゼミナールを開催した。10回目には、各班（3班）ごとに分かれて、「自分たちの健康づくり・介護予防活動」についての試案をまとめ、発表してもらった。次年度には、まとめられた試案を地域で具体的に展開してもらうこ

ととし、その住民主体の活動を研究者が「フォローアップ講座」として支援する予定である。このような活動の経過を資料として蓄積し、活動創出のプロセスを評価する。また、今年度は、2013年度に行ったベースライン調査の一部を日本公衆衛生学会で発表した。

### (3) 高齢者の介護予防および災害時支援に関する研究

本研究は、加齢・発達研究所（芳賀博、新野直明、上出直人）が多摩市医師会からの受託研究として実施したものである。介護予防や災害時支援に対する多摩市在住の高齢者の認識の実態を明らかにするとともにそれらに関連する要因を検討することにより、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるための施策に反映させることを目的としている。

調査は、多摩市在住の65歳以上の中から無作為に選ばれた3,000名を対象として、2015年9月に郵送法にて行われた。回収数は1,854名（回収率61.8%）、有効回答数は1,811名（60.4%）であった。現在結果の分析中であり、今年度末に報告書を完成させる予定である。

### (4) その他

平成24年度に行った老人保健健康増進事業「地域包括ケアを支える医療機関と保険者機能連携に関する調査研究事業」のデータに基づいて、「都市部の地域包括ケアシステム構築における課題と方策－行政および在宅医療の視点から－」についての論文をまとめ、日本応用老年学会の機関紙「応用老年学」に発表した。

宮城県T市における2013年度の調査で筋骨格系の痛みがあると回答した1,118人を対象として、痛みの変化が日常生活に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、1年後の2014年の同時期（11月）に追跡調査を行った。1,005人（89.9%）から回答が得られ、現在、結果の分析中である。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 芳賀博（編集委員「⑤研究」「⑭保健・医療」）：介護福祉とアクションリサーチ、介護福祉と介入研究、介護福祉にかかわる老年学、介護福祉学事典、日本介護福祉学会事典編纂委員会編、ミネルヴァ書房、200、206、668、2014年
- 2) 芳賀博（編集委員）：第3章保健福祉支援による問題解決、保健福祉学－当事者主体のシステム科学の構築と実践－、日本保健福祉学会編、北大路書房、42～51、2015年

### 【論文】

- 1) 佐藤美由紀、山科典子、安斎紗保理、植木章三、柴善崇、新野直明、渡辺修一郎、花里陽子、芳賀博：都市部の地域包括ケアシステム構築における課題と方策－行政および在宅医療の視点から－、応用老年学, 8, 63-73, 2014.
- 2) 加藤佐千子、渡辺修一郎、芳賀博、今田純雄、長田久雄：女性高齢者の食物選択動機と野菜選択、健康度自己評価、個人属性との関連、日本食生活学会誌、25（3）191-202、2014

## 【学会発表】

- 1) 山科典子、柴喜崇、渡辺修一郎、新野直明、植木章三、芳賀博：高齢者の福祉用具使用状況－無作為抽出による実態調査－、第49回日本理学療法学会、横浜、2014.5
- 2) 池田晋平、内田恵美子、芳賀博：在宅要介護高齢者の主観的健康感と関連する自覚症状とその特徴－認知機能が正常～軽度低下した高齢者への調査、第15回日本認知症ケア学会大会、東京、2014.5.31～6.1
- 3) 佐藤美由紀、斉藤恭平、芳賀博：アクションリサーチによる社会参加促進型ヘルスプロモーションプログラムの長期的効果－住民の主体性に基づく地域社会における高齢者の役割の見直しと創出－、第56回日本老年社会科学会、岐阜県下呂市、2014.6
- 4) Shinpei Ikeda, Emiko Uchida, Hiroshi Haga : Self-Rated Health and Aging in Place - The Role of Physical Functions and Lifestyle Factors among Frail Older Adults -, 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, Yokohama, Japan, 2014.6.18～21
- 5) 佐藤美由紀、安斎紗保理、芳賀博：住民の視点による社会参加促進型ヘルスプロモーションプログラムの効果と課題、第9回日本応用老年学会、相模原市、2014.10
- 6) 安斎紗保理、佐藤美由紀、柴喜崇、吉田裕人、芳賀博、植木章三：地域在住高齢における痛みに対する行動的対処方略とIADLの関連、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 7) 植木章三、吉田裕人、犬塚剛、片倉成子、安斎紗保理、柴喜崇、芳賀博：地域高齢者の介護予防等の活動への参加状況等からみた積極的な高齢リーダーがいる意義、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 8) 佐藤美由紀、斉藤恭平、若山好美、芳賀博：地域社会における高齢者の役割の見直しに基づく地域活動創出に至るプロセス、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 9) 犬塚剛、植木章三、吉田裕人、高戸仁郎、本田晴彦、芳賀博：地域在宅高齢者における食品摂取の多様性低下に関連する要因、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 10) 高戸仁郎、植木章三、犬塚剛、吉田裕人、本田晴彦、芳賀博：地域在宅高齢者の体力変化と運動関連自己効力感との関連について、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 11) 兪 今、安 順姫、新野直明、芳賀博：高齢者のうつ状態に対するうつ予防プログラムの中長期的な効果検証、第73回日本公衆衛生学会、宇都宮、2014.11
- 12) Hiroto Yoshida, Shouzo Ueki, Jinro Takato, Go Inuzuka, Naoko Arayama, Hiroshi Haga : Impact of "Standing up from a Long Sitting Position on the Floor" on Medical Expenditures in Older Japanese Population, The Gerontological Society of America's 67th Annual Scientific Meeting, Washington, DC 2014.11.08

#### 【科研費などの助成金】

1) 科学研究費 基盤研究 (B)

研究課題名：地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案 (分担)

2) 受託研究 (多摩市医師会)

研究課題名：高齢者における介護予防および災害時支援に関する調査 (代表)

3) ファイザーヘルスリサーチ振興財団 第23回国内共同研究助成

研究課題名：高齢者の役割見直しに基づく社会参加促進プログラムの長期的効果 (分担)

4) 日本興亜福祉財団ジェロントロジー研究助成 (2014年度)

研究課題名：高齢者の役割見直しによって創出された地域活動10年間のプロセスと効果：住民主体により活動が継続されている理由と高齢者及び地域社会に対する影響 (分担)

## 1. 研究課題

介護予防に関する研究

## 2. 研究活動の概要

東京都中央区で転倒予防教室を実施し、その効果を検討する試みを継続した。転倒予防教室は、1回10～15名の住民に対して、運動、講義、フットケアなどからなる2時間程度のプログラムを1週間間隔で4回提供し、さらに、約1年後にフォローアップとして同様のプログラムを実施するという内容である。今年度のフォローアップは、2013年度教室参加者に実施した。今年度も、1昨年度に開発した転倒予防のための教育用冊子、ならびに壁掛け教材、タオル教材、マグネット、ステッカーの啓発用教材を用いる包括的転倒予防教育「SAFETY on！12週間プログラム」と称する教育プログラムを実施した。転倒発生、筋力や歩行能力などの身体的要素、満足度やうつ状態などの精神的要素、人間関係などの社会的要素に対する効果について、前後比較、教材を使用しなかった対照群との比較からこの包括的教育プログラムの効果に関する分析・検討を継続している。また、教室参加が、参加者相互の人間関係に与える影響についての調査結果の分析にも参加している。

さらに、同中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続している。

その他に、研究員とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を継続した。東京都府中市、新潟県長岡市でプログラムを用いた教室を実施し、効果に関する調査、分析結果の一部を発表した。

また、東京都多摩市医師会とともに、「高齢者における介護予防および災害時支援に関する調査」を実施した。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 新野直明：日本の高齢者の健康状態の推移－高齢者は健康になっているか、老年社会科学、査読無、36巻、52－54、2014

- 2) 八島妙子、新野直明：在宅高齢者の主観的な生活リズムの性差に関する研究、日本未病システム学会雑誌、査読有、20巻、1-5、2014
- 3) 寺山圭一郎、新野直明：急性期病院における術後高齢大腿骨近位部骨折患者の自宅退院に関する要因、応用老年学、査読有、8巻、54-62、2014

#### **【学会発表】**

- 1) 平松万由子、新野直明：グループホームにおける終末期ケア実践に関する実態調査、第34回日本看護科学学会、名古屋、2014年11月
- 2) 八島妙子、新野直明：地域在宅高齢者における生活リズムの規則性とその変化の特徴、第21回日本未病システム学会、大阪、2014年11月

#### **【科研費などの助成金】**

- 1) 文科省科研費挑戦的萌芽研究：地域高齢者のための包括的転倒予防SAFETY on!プログラムの開発と効果の検証（分担）
- 2) 文科省科研費基盤C：高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究（分担）

#### **【その他の活動】**

- 1) 「高齢期のうつを正しく理解しよう」、横須賀市介護予防講演会、2014年7月
- 2) 「認知症を正しく理解して老後を楽しく暮らす」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2014年10月
- 3) 「知っておきたいところのメンテナンス～うつ予防の視点から～」、墨田区平成26年度介護予防講演会、2014年11月

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法
- (2) ケアマネジメントの効果について
- (3) 災害時のソーシャルワークについて
- (4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性
- (5) ソーシャルワークの評価について
- (6) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について
- (7) 社会福祉士養成教育カリキュラム見直しの評価研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法

これについては、実践的な観点から個人支援と地域支援を結びつけることとして、地域のネットワークづくりについて一定の研究成果を得ることが出来た。特に、支援困難事例の検討から地域のニーズを導きだし、ニーズ充足方法についての実証的な成果をあげることが出来た。以上は、2013年2月に刊行した『地域のネットワークづくりの方法－地域包括ケアの推進に向けて』（中央法規出版）をもとに、平成25年度挑発的萌芽研究「ケースマネジメントとコミュニティマネジメントの連結によるソーシャルワーク論に関する研究」（研究代表：白澤政和）でもって、先駆的な地域包括支援センターや社会福祉協議会での地域ニーズの導き出し方およびニーズの充足方法についての実証研究を深め、さらに全国の地域包括支援センターでの地域ニーズの把握から地域活動創設・実施についての実態を明らかにした。

### (2) ケアマネジメントの効果について

客観的QOLを尺度化し、ケアマネジャーと利用者のマッチングによるパネル調査を4度（4年間）実施してきたが、そこから身体・心理・社会面で構成される客観的QOL尺度化を試みている。これについては、昨年度までは老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員の資質向上とケアマネジメントのあり方に関する調査・研究事業」（研究代表：白澤政和）でもって進めてきたが、4年間での時系列的での利用者ケアマネジャーに関するデータベースをもとに、ケアマネジメントの効果について分析を深めた。



### **(3) 災害時のソーシャルワーク実践について**

災害ソーシャルワークの枠組みを明らかにし、具体的に展開すべく、三菱財団からの「災害ソーシャルワークの理論化と教材開発・教育方法の体系化に関する研究」への研究助成を社団法人日本社会福祉士養成校協会が受けて、外部から被災地へのソーシャルワーカー派遣マニュアルの作成を行った。同時に、派遣する対象者に対する研修を行い、マニュアルの修正を行った。

### **(4) 高齢者ケアマネジメントと障害者ケアマネジメントの共通点と相違性**

障害者ケアマネジメントでは、時系列での利用者とケアマネジャーのマッチングでの変化を調査分析している。これは厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））「障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究」（研究代表：白澤政和）で行っていたものであり、この研究と上記（2）の高齢者ケアマネジメントに関する研究を合わせて、両者の比較研究を行っている。

### **(5) ソーシャルワークの評価研究**

障害者、患者、児童に対するソーシャルワークについて、3年間で、ソーシャルワーク実践およびソーシャルワークの制度について評価研究を行ってきたが、その結果をもとに、今年度は、「ソーシャルワーク実践の評価マニュアル」および「ソーシャルワークの制度評価マニュアル」の作成を進めている。これは、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（研究代表：白澤政和）をもって、実施したものを継続して研究を続けている。

### **(6) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について**

2012年度から義務化された福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画書の作成について、ケアマネジメントとの関係をもとにしたその過程を明らかにし、作成過程の調査結果をもとに、ガイドラインの作成を行った。これは、平成25年度老人保健健康増進等事業「福祉用具専門相談員の質の向上に向けた調査研究事業」でもって実施したが、それをもとに、広く普及するための、ガイドラインを実施する手順書を作成した。

### **(7) 社会福祉士養成教育カリキュラム見直しの評価研究**

社会福祉士の養成カリキュラムが2012年度に見直されたが、その結果についての評価研究を、日本社会福祉士養成校協会が社会福祉試験・振興センターからの助成を受けて行っているが、特に、大幅な変更のあった実習についての評価分析を行った。

### 3. 研究業績

#### 【編著書】

- 1) 『社会福祉学事典』編集委員長：白澤政和、pp.1～784、「地域包括ケアの考え方と方法」白澤政和、pp.556～557、日本社会福祉学会事典編集委員会（編）、丸善出版、2014年
- 2) 『介護福祉学事典』編纂委員：井上千津子・白澤政和他、pp.1～829、白澤政和「①-1 介護福祉と介護の関係」pp.4～5、「①-2 介護福祉の理念」pp.6～7、「①-3 介護福祉の対象」pp.8～9、「①-4 介護福祉の倫理」pp.10～11、「①-5 介護における人権擁護」pp.12～13、「①-6 介護における尊厳保持」pp.14～15、「①-7 介護における自立支援」pp.16～17、「①-8 介護における自己決定」pp.18～19、「①-9 介護と看護の関係」pp.20～21、「①-10 施設看護の特性」pp.22～23、「①-11 在宅介護の特性」pp.24～25、「①-12 認知症の人に対する介護福祉の役割」pp.26～27、「①-13 介護福祉における医療的ケアの位置づけ」pp.28～29、「①-14 終末期における介護福祉の役割」pp.30～31、「①-15 ICFモデルとICIDHモデル」pp.32～33、「①-16 医学モデルと社会モデルの関係」pp.34～35、「①-17 介護福祉とリハビリテーション」pp.36～37、「①-18 介護予防の理念」pp.38～39、「①-19 地域包括ケアにおける介護福祉」pp.40～41、「①-20 介護過程の展開」pp.42～43、日本介護福祉学会事典編纂委員会（編）、ミネルヴァ書房、2014年
- 3) 『地域包括ケアの実践と展望－先進的地域の取り組みから学ぶ－』大橋謙策・白澤政和編、pp.1～293、「高齢者総合ケアセンターこぶし園へのコメント」pp.28～30、「新川老人福祉会へのコメント」pp.41～43、「宇治明星園へのコメント」pp.56～58、「健光園へのコメント」pp.70～72、「宝塚市社会福祉協議会へのコメント」pp.134～136、「青山里会へのコメント」pp.150～152、「幸清会へのコメント」pp.228～230、「東京栄和会へのコメント」pp.273～275、終章「地域包括ケアの今後の展開に向けて」pp.281～291、白澤政和、中央法規出版、2014年
- 4) 『福祉用具サービス計画作成ガイドブック』白澤政和監修、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会編集、pp.1～168、「はじめに」、「第1章 福祉用具サービス計画およびガイドラインの位置づけ」pp.1～9、白澤政和、中央法規出版、2014年
- 5) 『相談援助演習』白澤政和・福富昌城・牧里每治・宮城孝編集、「はじめに」pp.i～iii、白澤政和、中央法規出版、2015年

#### 【編著内論文】

- 1) 「第4章 北東アジアでの介護の社会化の現状と課題」pp.67～94、白澤政和、『高齢社会の課題とアジア共同体』荻野浩基編、芦書房、2014年

## 【論文】

- 1) “Promotion of individual social services and establishment of service delivery system: Based on the launching process of Japanese elderly welfare policy” Masakazu Shirasawa, Comparison of the East Asian Social Welfare: Welfare Responsibility and Welfare Provision, 中国社会科学出版社、pp.109~122, 2014
- 2) 「地域包括ケアシステムと在宅ケアー地域包括ケアでの在宅生活支援に向けてー」白澤政和、『所報』第86号、一般財団法人社会福祉研究所、pp.1~10、2014年
- 3) 「特別養護老人ホームの生活相談員が行うソーシャルワークとケアワーク実践の両立性に関する研究」上田正太・白澤政和他、『厚生の指標』第60巻第13号、pp.15~21、2013年
- 4) 「介護老人福祉施設に従事する介護職の「役割ストレス」とバーンアウトの関連ー役職者・非役職者別の検討」金原京子・白澤政和他、『メンタルヘルスの社会学』19、pp.56~64、2013年
- 5) 「介護支援専門員が認識する時間を要する業務内容とそれに関連する心理状態に関する探索的研究ーテキストマイニングに基づいた自由記述文からのキーワード抽出ー」兪秀娟・白澤政和他、『大市大生活科学研究誌』Vol.12. pp.35~47、2014年
- 6) 「施設系サービスにおける介護過程の展開と課題」白澤政和、『介護福祉』平成26年冬季号 No.96、公益財団法人社会福祉振興・試験センター、pp.47~58、2014年
- 7) 「介護の不安を解消するために」白澤政和、『高齢者の不安ー経済・健康・孤独ーAdvances in Aging and Health Research 2014』、公益財団法人長寿科学振興財団、pp. 115~125、2015年
- 8) 「ケアマネジメントの現状と将来への提言ー効果的・効率的な提供に向けてー」白澤政和、『老年精神医学雑誌』26、pp.48~55、2015年
- 9) 「中学生の高齢者イメージ形成プロセスに高齢者施設訪問経験が与える影響」中村正人・白澤政和、『老年学雑誌』第5号、pp.21~38、2015年
- 10) 「一般病院における身体拘束廃止プロセスに関する質的研究」奈良由美・白澤政和、『老年学雑誌』第5号、pp.39~54、2015年
- 11) “Current situation and issues of the long-term care insurance system in Japan” M. Shirasawa, Journal of Asian Public Policy, Vol.8 No.1, pp.1-12, 2015

## 【その他論文】

- 1) 「介護保険の現状と今後」白澤政和、『NHKテキスト 社会福祉セミナー』2014年12月~2015年3月号、NHK出版、pp.48~63、2014年

## 【報告書】

- 1) 『平成22～25年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書 ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究』白澤政和他、pp.1～797、2014年
- 2) 『平成22～25年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野）研究調査報告書 障害者のQOL評価に基づくケアマネジメント手法開発の研究』白澤政和他、pp.1～369、2014年
- 3) 『平成25年度「介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の普及に向けての調査研究」報告書』白澤政和他、一般社団法人日本ケアマネジメント学会、pp.1～77、2014年
- 4) 『平成24年度「介護支援専門員のスーパービジョン実践としての実習型研修の普及に向けての調査研究」報告書』白澤政和他、一般社団法人日本ケアマネジメント学会、pp.1～100、2013年
- 5) 『認知症リーダー研修の評価報告書』白澤政和、株式会社スーパーコート、pp.1～69、2014年
- 6) 『介護支援専門員の福祉用具の活用および福祉用具専門相談員との関係に関する調査研究報告書』白澤政和、一般社団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団、pp.1～160、2015年
- 7) 『災害派遣福祉チーム（DWAT）研修テキスト』白澤政和他、一般社団法人日本社会福祉士養成校協会、pp.1～178、2015年

## 【学会発表】

- 1) シンポジウム「災害での老年社会科学の責務」企画・司会：白澤政和、『老年社会科学 2014.Vol.36-2 第56回大会報告要旨号』2014.6.6～8、日本老年社会科学会、pp.147～149、2014年
- 2) Key speech “Current Situation and Issues of the Long-term Care Insurance System in Japan” Masakazu Shirasawa：11th East Asian Social Policy（EASP）Conference, Honolulu, 2014.7.pp.24～25, 2014
- 3) Key speech 日本における地域包括ケア：ガバナンスの視点から、The 6th Annual Symposium of Chinese Social Welfare Academy, International Symposium of Welfare Governance：Indigenous Innovation and International Experience, Institute of Social Development and Social Work Studies, Nanjing University Opening Ceremony, Nanjing China, pp.26～35, 2014.7.7～8, 2014
- 4) シンポジウム「認知症の人に対するケアマネジメントの変遷と今後の課題」白澤政和、『日本認知症ケア学会誌 第15回日本認知症ケア学会大会 プログラム・抄録集』2014.5.31～6.1、一般社団法人日本認知症ケア学会、pp.78～79、2014年
- 5) 第1回学術研究集会シンポジウム「精神保健福祉学の役割を考える」シンポジスト：野中猛・

- 白澤政和他、『精神保健福祉学』第1巻第1号、一般社団法人 日本精神保健福祉学会、pp.39～59、2013年
- 6) 「高齢化と高齢者介護に対する日中韓三カ国の対応と課題」白澤政和、ソウル大学社会福祉研究所主催、ソウル大学社会科学大学教授会議室、2014.12.5、pp.37～91、2014年
  - 7) シンポジウム「未来から求められる社会福祉の貢献を考える」白澤政和他、日本社会福祉学会第62回大会（秋季学会）、pp.35～42、2014年
  - 8) 「障害者ケアマネジメントがサービス利用者の生活の質の変化に及ぼす要因について」森地徹・白澤政和他、p.51、日本社会福祉学会第62回大会（秋季学会）、2014年
  - 9) “Aging and Volunteering” Masakazu Shirasawa, German-Japanese Symposium on Positive Aging, 2012.10.9, pp.19～20, Tokyo, Japan, 2012
  - 10) 基調講演「社会福祉学分野の参照基準と今後の社会福祉教育・研究の課題」日本社会福祉教育学会第5回春季研究集会、pp.3～27、2015年
  - 11) “The Influence of Dementia and Stroke on the Changes of Condition of the Frail Elderly Live at Home” Ryosuke Hata, Masakazu Shirasawa, Kazutaka Masuda, Yuuko Takasuna, Yoshimasa Takase, Satoru Yosie, The Gerontological Society of America 66th Annual Scientific Meeting, P.114, Washington, 2014
  - 12) 「ケアマネジメント実践による要介護者等の状況変化の分析～要介護者等に対するケアマネジメント開始から4年間の縦断調査を基に～」畑亮輔、白澤政和、増田和高、米澤麻子、白木裕子、山田圭子、丹野克子、吉江悟、高砂裕子、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.54、2014年
  - 13) 「介護保険利用者の生活状況に対する「利用者本人の評価」と「介護支援専門員の評価」の一致度に関する研究」増田和高、畑亮輔、白木裕子、山田圭子、高砂裕子、吉江悟、丹野克子、米澤麻子、白澤政和、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.81、2014年
  - 14) 「相談支援専門員の実践がサービス利用者に及ぼす継続的効果の検証について」森地徹、小澤温、與那嶺司、橋本卓也、樽井康彦、清水由香、白澤政和、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.37、2014年
  - 15) 「相談支援専門員の実践に対するアウトカム評価の視点－事業所管理者へのインタビュー調査を通して－」橋本卓也、清水由香、與那嶺司、樽井康彦、森地徹、小澤温、白澤政和、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.38、2014年
  - 16) 「介護支援専門員を対象とした短期実習プログラムの教育効果－全国10地域の1年後フォローアップ調査の結果から－」吉江悟、白木裕子、奥田亜由子、山田圭子、辻敏子、大岡裕子、米澤麻子、福富昌城、白澤政和、前沢政次、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.98、2014年
  - 17) 「障害福祉領域の相談支援事業に対する事業所管理者からみた評価視点に関する研究－構造評価・プロセス評価に焦点をあてて－」清水由香、橋本卓也、與那嶺司、樽井康彦、森地徹、小澤温、白澤政和、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.114、2014年



- 18) 「東日本大震災における地域包括支援センターの後方支援の実態と課題～岩手県・宮城県調査での沿岸部と内陸部の比較をもとに～」岡田直人、白澤政和、日本ケアマネジメント学会第13回研究大会、P.123、2014年

#### 【その他】

- 1) 「ケアマネジメント研究の同志、野中猛先生の夭折を哀悼する」白澤政和、『精神障害とりハビリテーション』VOL.18 NO.1、日本精神障害者リハビリテーション学会、p.10、2014年
- 2) 「追悼 野中猛先生」白澤政和、『ケアマネジメント学』第13号、pp.61～62、2014年
- 3) 「より質の高いサービス提供に向けて 福祉用具サービス計画作成ガイドラインを活用しよう」白澤政和、『福祉住環境コーディネーターのスキルアップ情報誌 FJC』 2014 Vol.36、福祉住環境コーディネーター協会、pp.4～7、2014年
- 4) 「メディカル事業30周年を祝す」白澤政和、『ふれあいの輪』第28巻・第3号、公益財団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団、p.8、2014年
- 5) 『地域包括ケアシステムを構築する上での地域包括支援センターのあり方に対する提言』座長：白澤政和、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会 調査研究特別委員会、pp.1～8、2014年
- 6) 連載「白澤教授のケアマネジメント快刀乱麻」白澤政和、『シルバー産業新聞』第59回「ケアマネジメントの有効性を考える④在宅支援による財源抑制への貢献」第209号、第60回「ケアマネジメントの有効性を考える⑤利用者の意欲を引き出す支援」第210号、第61回「ケアマネジメントの有効性を考える⑥チームアプローチの「要」としてのケアマネジャー」第211号、第62回「ケアマネジメントの有効性を考える⑦介護離職の解消」第212号、第63回「ケアマネジメントの有効性を考える⑧利用者の状況の変化への対応 継続的な支援」第213号、第64回「ケアマネジメントの有効性を考える⑨不要なサービス提供の排除」第214号、第65回「ケアマネジメントの有効性を考える⑩災害時でのケアマネジャーの対応」第215号、第66回「ケアマネジメントの有効性を考える⑪介護リスクの予見と回避」第216号、第67回「ケアマネジメントの有効性を考える⑫まちづくりへの貢献」第217号、第68回「ケアマネジメントの有効性を考える⑬利用者の自立の支援」第218号、2014年、第69回「ケアマネジメントの有効性を考える⑭介護者の介護負担感の軽減」第219号、第70回「ケアマネジメントの有効性⑮ケアマネジメント構造の改革（その1）」第220号、2015年、第71回「ケアマネジメントの有効性⑯ケアマネジメント構造の改革（その2）」第221号、2015年
- 7) 「介護保険制度の見直しにあたって－地域包括支援センターに焦点を当てて提言する－」白澤政和、『全国の支援センターを結ぶネットワーク』全国地域包括・在宅介護支援センター協議会会報Vol.122、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会、pp.2～9、2014年
- 8) 総合討論「住民と地域の団体・機関の協働による安心して暮らせるまちづくり」コーディネーター：白澤政和、『第26回ニッセイ財団シンポジウムの記録集「高齢社会を共に生きる」』2012.11.23、公益財団法人日本生命財団、pp.43～62、2012年

- 9) 「介護保険の活用」監修：白澤政和、『NHKここが聞きたい名医にQ 脳卒中のベストアンサー』、主婦と生活社、pp.114～115、2013年
- 10) 「実証的研究の推進を」白澤政和、『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク』山野則子編、明石書店、pp.6～7、2015年
- 11) 連載「認知症の人を支援するケアマネジメント」白澤政和、『Dementia Support』「デイサービスの活用で有料老人ホームの生活を支援する」2014年1号pp.20～24、「多職種の連携と権利擁護の視点で支え、在住移行を実現」2014年2号pp.32～35、エーザイ株式会社、2014年
- 12) 連載『ふれあいの輪』白澤政和・増山緑「サービス付き高齢者向け住宅におけるケアマネジメント」173号pp.14～18、白澤政和・宮川亮一「サービス付き高齢者向け住宅における生活の限界」175号pp.14～18、公益財団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団、2014年
- 13) 連載「地域包括ケアの在り方」白澤政和、『音楽協通信』第1回「未知の超高齢社会をどう乗り越えるのか」2015年創刊号p.6、一般社団法人日本音楽健康協会、2015年
- 14) 連載「地域の変化を促すネットワークづくり～すべての住民のための地域包括ケアシステムを目指して～」『福祉タイムズ』第760号、pp.8～9、社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会、2015年

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究「ケースマネジメントとコミュニティマネジメントの連結によるソーシャルワーク論の確立」(H25～27) (代表者)

#### 【受託研究活動】

- 1) フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団事業「介護支援専門員の福祉用具の活用および福祉用具専門相談員との連携に関する調査研究」

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者における健康の社会階層差
- (2) 要介護透析患者の療養生活の支援態勢
- (3) 高齢期におけるセクシャリティに関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者における健康の社会階層差

#### 1) ライフコースにおける経済的困窮感が高齢期の健康に与える効果

欧米では、近年、高齢期における健康を規定する要因として、高齢期に至るまでのライフコース上のリスク要因に着目する研究が行われるようになった。しかし、日本では、このような視点からの研究はほとんどない。加えて、ライフコース上のリスク要因の健康への効果を、高齢期の社会経済的な資源によって緩衝できるか否かを検証した研究は欧米でもほとんどない。本研究の目的は、①リスク要因として経済的困窮感に着目し、ライフコース上の経済的困窮感の経験（経験の時期と経験の蓄積）が高齢期における健康に効果があるか否か、②経済的困窮感の健康への効果が、高齢期における経済的資源によって緩衝できるか否か、を検証することにある。ライフコース上の年齢区分は、児童（18歳以前）、成人前期（25～35歳）、成人後期（35～50歳）であった。分析の結果、次のことが明らかにされた。現在および親世代の社会経済的要因の影響を調整しても、高齢期に至るまでに経済的困窮感を多く経験した人、あるいは成人前期に経済的困窮感を経験した人ではそれ以降に経済的困窮感を経験しなかったとしても困窮感を経験しなかった人と比較した場合、疾患罹患数が多く、健康度自己評価が低かった。高齢期の収入や経済的裕福感（困窮感の逆）は、以上のようなライフコース上の経済的困窮感の効果を緩衝する作用はなかった。

この研究は、東京都健康長寿医療センター研究所との共同研究である。

#### 2) 透析患者の心身の健康の社会経済階層による格差：年齢、時代、生年コホートによる差

欧米だけでなく、日本においても青年期から中年期、さらに高齢期に至る広い年齢階級において、社会経済階層による健康格差の存在が明らかにされている。さらに、欧米においては、この健康格差が、年齢、時代、生年コホートによって違いがあることも明らかにされつつある。しかし、疾患や障害を有する人の間で社会経済階層による健康格差があるか否かについては、十分な検討がなされていない。本研究では、全国の透析患者に対する繰り返しの横断調査を活用し、透析患者の身体的・精神的健康の経済階層による格差の存在およびその階層格差が、年齢、時代、



と、そして、その効果は年齢、時代によって異なることが示唆された。この研究は、透析医療研究会との共同で行っている。

## (2) 要介護透析患者における療養生活の支援態勢

高齢者が要介護状態になった場合、介護保険制度では介護支援専門員が療養生活の支援態勢の整備のためにケアマネジメントを行う。透析患者は継続的に透析を受けなければならないため、定期的に透析医療機関に通院する必要がある。加えて、食事療法を中心としたセルフケアを実施することも健康維持のために必要なものである。このような医療やセルフケアへの援助が特に必要な要介護高齢透析患者に対して、介護支援専門員はどのようなケアマネジメントを行っているのでしょうか。本研究の目的は、要介護高齢透析患者に対するケアマネジメントに伴う問題の抽出とその背景について分析することにある。今年度は、要介護認定の透析患者を担当するケアマネジャーと家族に対する調査を終了した。次年度にデータの分析を行う予定である。この研究は、透析医療研究会との共同で行っている。

## (3) 高齢期におけるセクシャリティと心身の健康に関する研究

日本では、たとえば「高齢者は無性（asexul：他者に対して恒常的に恋愛感情や性的欲求を抱かないこと）である」と誤った先入観がある。本研究の目的は、学際的なアプローチによって高齢者のセクシュアリティと心身の健康状態および社会経済状態との関係を定量的に明らかにし、新しい視点から多様で個性的な高齢者の生態像を正確に分析し、超高齢社会における望ましいウェルビーイングの在り方を検討することである。研究のキーワードのセクシュアリティは、異性との性的関係のみならず人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやり、包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生活環境などもすべて含まれる。今年度は、全国規模の質問票および面接調査の準備に当たった。この研究は、科研費「学際アプローチによる高齢者のセクシュアリティと心身の健康・社会経済状態の実証」（研究代表者：国立保健医療科学院・今井博久）の分担研究者として行っている。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 杉澤秀博・近藤尚己「社会関係と健康」川上憲人・他・編著（2015）『社会と健康：健康格差解消に向けた統合科学的アプローチ』東京大学出版会

### 【論文】

- 1) Sugisawa H, Nomura T, Tomonaga M (2015) Psychosocial Mediators between Socioeconomic Status and Dietary Habits among Japanese Older Adults J Nutr Health Aging 19 (2) : 130-136.
- 2) 原田謙・杉澤秀博（2015）「ソーシャル・サポート、ネガティブ・インタラクションと精神

的健康」『実践女子大学人間社会学部紀要』11：63-77

- 3) 柳沢志津子・杉澤秀博(2015)「企業退職男性高齢者における地域社会活動への参加継続プロセスに関する検討-料理サークルを事例とする組織の戦略と参加メンバーの相互の視点から-」『老年学雑誌』5：掲載確定
- 4) 友永美帆・野村知子・杉澤秀博(2015)「単身高齢者の暮らしにみる配食サービスの生かし方」『老年学雑誌』5：掲載確定
- 5) 藤原妙子・杉澤秀博(2015)「定年退職を経験した既婚女性の社会参加の意味づけ」『老年学雑誌』5：掲載確定
- 6) 杉澤秀博(2015)「ライフコースにおける経済的困窮感が高齢期の健康に与える効果」東京都健康長寿医療センター編『高齢者の健康と生活に関する縦断的研究-第8回調査(2012)研究報告書-』掲載

**【学会発表】**(筆頭著者のみ)

- 1) Sugisawa H, Koyayashi E, Liang J, Impact of Life Span Financial Hardship on the Health of Elderly Japanese, Gerontological Society of America 67th Annual Scientific Meeting, Nov, 2014, Washington, D.C.
- 2) 杉澤秀博・清水由美子・熊谷たまき、「透析導入年齢による高齢期における身体的・社会的・経済的不利」日本老年社会科学会第56回大会 2014.6、岐阜

**【科研費などの助成金】**

- 1) 科研費「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」(研究代表者)
- 2) 科研費「学際アプローチによる高齢者のセクシュアリティと心身の健康・社会経済状態の実証研究」(分担研究者)
- 3) 科研費「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御:研究成果の統合と社会への還元」(分担研究者)

## 1. 研究課題

- (1) 初夏の気温の変動が独居高齢者の生活活動に及ぼす影響
- (2) 都市部在宅高齢者のフードファディズムが食品摂取パターンに及ぼす影響

## 2. 研究活動の概要

### (1) 初夏の気温の変動が独居高齢者の生活活動に及ぼす影響

【目的】初夏の気温変動が、高齢者の生活活動に及ぼす影響を明らかにする。

【方法】東京都、群馬県、宮城県の独居高齢者34名（平均年齢81.6歳±標準偏差7.7歳）を対象とした。東京都の最高気温が異常高値を示した2013年7月9～15日と、最高気温が平常の水準になった7月16～22日について、対象の居宅に設置した赤外線センサーの1分間毎の体動検知データの1日全感知量を、週別、設置地域別、設置場所ごとに比較した。

【結果】各対象地域の週別平均最高気温は群馬県を除き、7月9～15日が7月16～22日より有意に高かった。全設置場所および寝室の平均総センサー感知回数は、群馬県を除き、いずれも7月16～22日の方が有意に多かった。

【結論】赤外線センサー検知回数からみた独居高齢者の初夏の総活動量および寝室の活動量は、最高気温が異常に高値を示した週は有意に少なくなっていた。最高気温が異常高値を示す日には、独居高齢者の安否確認をより厳重に行う必要がある。

### (2) 都市部在宅高齢者のフードファディズムが食品摂取パターンに及ぼす影響

【目的】「高齢になるほど肉類は控えた方がいい」というフードファディズムが高齢者の食品摂取パターンに及ぼす影響を明らかにする。

【方法】東京都S区の65～70歳の地域在宅高齢者から無作為に抽出した1,000名に対し、無記名の自記式質問紙による郵送調査を実施した。食品群別食品摂取頻度を用いた主成分分析により算出した各々の主成分得点を従属変数とし、「高齢になるほど肉類は控えた方がいい」に対する考え、属性、咀嚼力、各種生活習慣、栄養知識などを独立変数とした一般線型モデルにより、食品摂取パターンに関連する要因を検討した。

【結果】食品群別食品摂取頻度による主成分分析の結果、第1主成分は、野菜、海藻、果物、油脂などの負荷量が高く、「基本的食品」の摂取パターンとした。第2主成分は、乳製品、卵、肉、牛乳、油脂の負荷量が高く、「高脂質含有食品」の摂取パターンとした。第3主成分は、

肉、魚介類、卵の負荷量が高く、「主菜の食品」の摂取パターンとした。一般線型モデルの結果、「高齢になるほど肉類は控えた方がいい」について「全くそう思う」と回答した群は、「違う」と回答した群に対して、「基本的食品」および「高脂質含有食品」の主成分得点を有意に下げていた。

**【結論】** 「高齢になるほど肉類は控えた方がいい」という誤った考えは、高脂質含有食品の摂取を減らし、基本的食品の摂取も少なくすることにつながり高齢者の食生活にとって好ましくないことが示された。

### 3. 研究業績

#### 【著書】

- 1) 渡辺修一郎：第一部第一章 老化と高齢者（直井道子，中野いく子，和気純子編）高齢者福祉の世界 補訂版. 13-32, 有斐閣, 東京, 2014年4月.
- 2) 渡辺修一郎：メタボリックシンドローム対策（嶋野洋子，島田美喜編）公衆衛生実践キーワード. 86-87, 医学書院, 東京, 2014年10月.

#### 【論文】

- 1) 柴喜崇, 渡辺修一郎：地域在住高齢者における加齢に伴う生活機能の変化およびその予防の考え方. 理学療法学, 41 (5) : 320-327, 2014.
- 2) 加藤佐千子, 渡辺修一郎, 芳賀博, 今田純雄, 長田久雄：女性高齢者の食物選択動機と野菜選択, 健康度自己評価, 個人属性との関連. 日本食生活学会誌, 25 (3) : 191-202, 2014.
- 3) 渡辺修一郎：2015年問題から2025年問題へ. 臨床栄養, 126 (1) : 18-23, 2015.
- 4) 渡辺修一郎：熟年世代の睡眠と健康を考える - 最新「眠りの医学」. 美感遊創, 147 : 7-10, 2014.
- 5) 渡辺修一郎：保険者機能を堅持するための改革に向けて. 健康保険, 68 (8) : 28-33, 2014.
- 6) 佐藤美由紀, 山科典子, 安齋佐保理, 植木章三, 柴喜崇, 新野直明, 渡辺修一郎, 花里陽子, 芳賀博：都市部の地域包括ケアシステム構築における課題と方策 - 行政および在宅医療の視点から. 応用老年学, 8 (1) : 63-73, 2014.
- 7) Fujiwara Y, Shinkai S, Kobayashi E, Minami U, Suzuki H, Yoshida H, Ishizaki T, Kumagai S, Watanabe S, Furuna T, Suzuki T. : Engagement in paid work as a protective predictor of basic activities of daily living disability in Japanese urban and rural community-dwelling elderly residents : An 8-year prospective study. Geriatr Gerontol Int. 2015 Jan 22. doi : 10.1111/ggi.12441.
- 8) 渡辺修一郎：夏の気温変動が独居高齢者の屋内活動量に及ぼす影響. 厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）「認知機能低下高齢者への自立支援機器を用いた地域包括

のシステムの開発と評価」分担研究報告書, 197-202, 2014.

- 9) 植田拓也, 柴喜崇, 水野公輔, 佐藤春彦, 渡辺修一郎: 新しい脊柱後彎の定量的測定方法の提案  
小型ジャイロセンサを用いた測定の再現性および妥当性の検討. 理学療法学, 41 (6) : 331  
-337, 2014.

#### 【学会発表】

- 1) 藤原佳典, 長谷部雅美, 野中久美子, 小池高史, 深谷太郎, 村山幸子, 李娥, 植木章三, 吉田裕人, 亀井智子, 渡辺修一郎: 見守りセンサーを用いた独居高齢者の生活支援策の開発 (その1) ~利用者のアウトカム評価~. 日本老年社会学会第56回大会, 2014年6月7日.
- 2) 渡辺修一郎, 奚雍: 都市部在宅高齢者のフードファディズムが食品摂取パターンに及ぼす影響~「高齢になるほど肉類は控えた方がいい」というフードファディズムについて~. 日本老年社会学会第56回大会, 2014年6月7日.
- 3) 渡辺修一郎, 藤原佳典, 深谷太郎, 野中久美子: 初夏の気温の変動が独居高齢者の生活活動に及ぼす影響. 第56回日本老年医学会学術集会, 2014年6月13日.
- 4) 伊藤直子, 森田恵子, 太田淳子, 蛭名小百合, 奥山陽子, 渡辺修一郎: 高齢者の嚥下機能と姿勢との関連: 3回唾液積算時間評価を用いて. 第9回日本応用老年学会総会, 2014年10月26日.
- 5) 渡辺修一郎: 大会長講演. 第9回日本応用老年学会総会, 2014年10月26日.
- 6) 井上智代, 渡辺修一郎: 農村部における健康に資するソーシャル・キャピタルの現状. 第73回日本公衆衛生学会総会, 2014年11月6日.
- 7) 山科典子, 柴喜崇, 渡辺修一郎, 新野直明, 植木章三, 芳賀博: 高齢者の福祉用具使用状況. 第49回日本理学療法学術大会, 2014年6月1日.
- 8) 齋藤崇志, 大森祐三子, 大森豊, 渡辺修一郎: 訪問理学療法を利用する要介護高齢者の Functional Independence Measureと関連する運動機能は何か?. 第49回日本理学療法学術大会, 2014年5月30日.
- 9) 植田拓也, 柴喜崇, 栗原翔, 前田悠紀人, 渡辺修一郎: 自主参加型体操グループへ参加している地域在住高齢者における腰痛・膝痛の有無と運動機能および精神的健康の関係. 第49回日本理学療法学術大会, 2014年5月30日.
- 10) 齋藤崇志, 大森祐三子, 大森豊, 渡辺修一郎: 訪問理学療法を利用する要介護高齢者を対象とした2.4m最速歩行時間に関連する運動機能要素. 第49回日本理学療法学術大会, 2014年5月30日.

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) : 台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究 (分担研究者)
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) : 高齢者就業の新たな調整型支援システムの構築に関する総合的研究 (分担研究者)

#### 【その他の研究活動】

- 1) 国土交通省の「健康・医療・福祉まちづくり研究会」委員として、健康・医療・福祉のまちづくりに関する研究に従事.
- 2) 世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 3) 東京都健康長寿医療センター研究所，社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として，社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 4) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.



## 1. 研究課題

- (1) 高齢者と家族に関する研究
- (2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究
- (3) 教育とその効果に関する研究【ジェンダー的視点から】

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者と家族に関する研究

このテーマのなかで、近年は高齢者の世帯構成の変化に焦点を当てている。日本では高齢者と子供との同居率が減少してきているが、これは1) 既婚の長男との同居という直系家族制度から子供全員と別居する核家族へという家族変動であるという説と、2) 子供の結婚時に一度別居しても高齢期に再度「途中同居」するように変化しただけで直系家族制度は健在であるという説がある。どちらの説が正しいかを検証したいと考え、東京都老人医療センター研究所【旧：東京都老人総合研究所】と東京大学・ミシガン大学が共同で行っているパネルデータで分析を行い、報告書原稿を提出した。この結果、途中同居は必ずしも多くはなかった。また途中同居を規定する要因は「親のADLの低下」であり、親の配偶者の死亡の効果は見られなかった。

### (2) 一人暮らし高齢者とその支援に関する研究

2010年後半に採択が決まった「ICTを活用した高齢者生活支援型コミュニティづくり」プロジェクト（代表者：小川晃子岩手県立大学教授 科学技術振興機構（JST）「コミュニティで創る新しい高齢社会デザイン」が終了した。これは過疎化している岩手県の中で4地域を選んで、一人暮らし高齢者の異変をICT（情報通信技術）を使って察知し、かつそれを生活支援にもつなげていく実験で、このような介入の前後での高齢者と地域社会の変化を把握しようという研究であった。夏には4回の調査をまとめた報告書原稿を提出し、研究結果は、共同で学会発表したり（学会発表の1～2）、学術会議のシンポジウム（講演の1、雑文の2）で発表した。

### (3) 教育とその効果に関する研究

長年、教員養成系大学に在籍したところから、学校教育とジェンダーに関する研究にグループでとりくみ、2010年度から科学研究費をとり、2012年2月から3月にかけていくつかの高校で調査を実施し、2013年に報告書を執筆した。その後研究会を継続し、高校生についての分析を進めて、共同で学会発表を行った（学会発表の4～6）。次に専門学校についての調査を行いたいと考え準備をしている。

### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 直井道子 千田睦美 小川晃子 山田幸恵 ICTを利用した安否確認は高齢者の社会的孤立の解消に効果はあったか 老年社会科学会 ポスター発表 2014,6,7 下呂温泉
- 2) 直井道子 小川晃子 自主シンポジウム「高齢期の社会的孤立におけるICT（情報通信技術）の可能性」における話題提供 「地方における取り組み」 2014,6,8
- 3) 松永博子 直井道子 中年期の人の高齢者観が自己老後像と向老意欲に与える影響－消極型と反面教師型の対比から 老年社会科学会 ポスター発表 2014,6,8 下呂温泉
- 4) 松川誠一、直井道子ほか 中沢、大竹、苫米地、眞鍋、木村  
Career Plan and Gender Norms Among High School Girls in Tokyo" at the XVIII ISA World Congress of Sociology (July 13–19, 2014) .
- 5) 松川誠一 直井道子 ほか中沢、大竹、苫米地、眞鍋、木村 桑原  
恋人の有無が高校生のジェンダー意識に与える影響－東京都における調査から
- 6) 眞鍋倫子、松川誠一、木村育恵 直井道子 高校生の進路意識とジェンダー 日本教育社会学会第66回大会（松山大学）2014,9,11

#### 【小文】

- 1) パネル調査の追跡対象者について 社会と調査第13号コラム「社会調査あれこれ」 2014
- 2) 直井道子 小川晃子 ICTを利用したコミュニティづくり 学術の動向 2015年1月号 70–74

#### 【その他の研究活動】

- 1) 日本学術会議 連携会員：今年度前半は第22期、後半は第23期の日本学術会議連携会員に選出された。22期は「東日本大震災の被害構造と日本社会の再建の道を探る分科会」で提言の提出に協力した。両期とも「社会変動と若者分科会」、「社会福祉学分科会」、「高齢者の健康分科会」に所属し、活動している。
- 2) 学会活動：日本社会学会／日本老年社会科学会（評議員）／日本家族社会学会／日本社会福祉学会（査読委員）
- 3) 研究活動：老人医療センター研究所 協力研究員
- 4) 社会的活動：老人医療センター研究所 倫理委員会委員／エイジング総合研究センター 評議員／社会福祉法人（老人ホーム、デイサービスなど経営）真寿会理事・評議員／興亜福祉財団 評議員／家計経済研究所 研究費助成審査委員会委員長
- 5) 講演：○直井道子・小川晃子 ICTを利用したコミュニティづくり  
日本学術会議 高齢者の健康分科会主催シンポ「高齢者が安心して暮らせる健康コミュニティ」2014,7,5 桜美林大学四谷校舎  
○日本社会の変化と家族の変化を重ねて振り返る－高齢者のライフコース  
放送大学渋谷246セミナー 2014,11,22



## 1. 研究課題

高齢ボランティアリーダーによる自主活動を通じた新たな介護予防運動プログラムの提案とその普及と効果に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### 【全体の概要】

本研究は、我々が従来から養成してきた高齢ボランティアリーダーを介して、地域特性を考慮した運動プログラム等を普及し、その介護予防に資する効果を検証しようとするものである。

### 【本年度の概要】

本年度は、昨年度計画した地域での介護予防に関する自主活動を行うリーダーの上位リーダー養成のための「元気応援コンシェルジュ勉強会」をT市ならびにA市で開催した。両市とも勉強会が終了し、参加者に修了証書を贈呈し活動への動機付けを行うとともに、次年度の自主活動等に必要な事項についてグループディスカッションを行い、地域の実情に即した活動プログラムの検討を行った。また、昨年度実施したベースライン調査において、特に「痛み」の訴えのあった回答者を選定し追跡するためのフォローアップ調査を、郵送にて10月～11月に実施した。

## 3. 研究業績

### 【著書】

- 1) 植木章三：第5章6節 介護予防に向けた実践（日本保健福祉学会編：保健福祉学－当事者主体のシステム科学の構築と実践－）．北大路書房．京都．p110－114．2015.

### 【論文】

- 1) 佐藤美由紀，山科典子，安齋紗保理，植木章三，柴喜崇，新野直明，渡辺修一郎，花里陽子，芳賀博：都市部の地域包括ケアシステム構築における課題と方策－行政および在宅医療の視点から－．応用老年学8（1）：63－73，2014．（査読有）
- 2) Emiko Saito, Shouzoh Ueki, Nobufumi Yasuda, Sachiko Yamazaki and Seiji Yasumura : Risk factors of functional disability among community-dwelling elderly people by household in

Japan : a prospective cohort study. BMC Geriatrics 2014, 14 : 93

(<http://www.biomedcentral.com/1471-2318/14/93>) (査読有)

#### 【学会発表】

- 1) 藤原佳典, 長谷部雅美, 野中久美子, 小池高史, 深谷太郎, 村山幸子, 李暎娥, 植木章三, 吉田裕人, 亀井智子, 渡辺修一郎: 見守りセンサーを用いた独居高齢者の生活支援策の開発 (その1) - 利用者のアウトカム評価 -. 老年社会科学36 (2) : 200, 2014.
- 2) 長谷部雅美, 野中久美子, 小池高史, 深谷太郎, 村山幸子, 李暎娥, 植木章三, 荒山直子, 松本真澄, 川崎千恵, 藤原佳典: 見守りセンサーを用いた独居高齢者の生活支援策の開発 (その2) - 地域ケア機関による月次レポートを用いた高齢者の生活状況の把握について -. 老年社会科学36 (2) : 201, 2014.
- 3) SAKAMOTO, Y., SUZUKI, K., OKAZAKI, K., SASAKI, K., UEKI, S.: CHANGE IN SALIVARY BIOMARKERS OF THE CHILDREN AND ADOLESCENTS IN A TSUNAMI DISASTER AREA. 19th annual congress of the European college of sport science, sport science around the canals, 2nd-5th July 2014, Amsterdam - The Netherlands.
- 4) 岡崎勘造, 鈴木宏哉, 坂本讓, 佐々木桂二, 植木章三: 沿岸部被災地域の子どもの座位時間に関する縦断変化とその関連要因の探索. 日本公衆衛生雑誌61 (10) : 394, 2014.
- 5) 坂本讓, 鈴木宏哉, 岡崎勘造, 佐々木桂二, 植木章三: 沿岸部被災地域の児童・生徒の免疫ストレス指標に影響を及ぼす要因の探索. 日本公衆衛生雑誌61 (10) : 394, 2014.
- 6) 植木章三, 吉田裕人, 犬塚剛, 片倉成子, 安齋紗保理, 柴喜崇, 芳賀博: 地域高齢者の介護予防等の活動への参加状況等からみた積極的な高齢リーダーがいる意義. 日本公衆衛生雑誌 61 (10) : 432, 2014.
- 7) 犬塚剛, 植木章三, 吉田裕人, 高戸仁郎, 本田春彦, 芳賀博: 地域在住高齢者における食品摂取の多様性低下に関連する要因. 日本公衆衛生雑誌61 (10) : 441, 2014.
- 8) 高戸仁郎, 植木章三, 犬塚剛, 吉田裕人, 本田春彦, 芳賀博: 地域在住高齢者の体力変化と運動関連自己効力感との関連について. 日本公衆衛生雑誌61 (10) : 442, 2014.
- 9) 安齋紗保理, 佐藤美由紀, 柴喜崇, 吉田裕人, 芳賀博, 植木章三: 都市部在住高齢者における痛みに対する行動的対処方略とIADLの関連. 日本公衆衛生雑誌61 (10) : 460, 2014.
- 10) Hiroto Yoshida, Shouzoh Ueki, Jinro Takato, Go Inuzuka, Naoko Arayama, Hiroshi Haga : Impact of "Standing up from a Long Sitting Position on the Floor" on Medical expenditures in Older Japanese Population. The Gerontological Society of America's 67th Annual Scientific Meeting, taking place in Washington, DC from November 5-9, 2014.
- 11) 植木章三, 高戸仁郎, 犬塚剛, 吉田裕人: 独居高齢者の足指筋力と握力ならびに外出頻度との関連. 第35回医療体育研究会・第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会・第16回合同大会 in KOBE 2014 (抄録集) : 36, 2014.

### 【その他】

- 1) 植木章三：ボランティアによる高齢者への運動普及. 体育の科学64 (12) : 863-867, 2014.
- 2) 植木章三：運動習慣の推進と栄養改善活動から得られる地域高齢者の健康状態. 臨床栄養126 (1) : 50-55, 2014.
- 3) 植木章三：高齢者主体の介護予防のまちづくり. 学術の動向20 (1) : 65-69, 2014.

### 【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会：平成25年～28年度科学研究費補助金（基盤研究B）（研究代表者：植木章三）

## 1. 研究課題

- (1) 地域高齢者の介護予防に関する周知度に関する研究
- (2) 高齢者の運動機能の判定方法に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 地域高齢者の介護予防に関する周知度に関する研究

本研究は多摩市医師会と協働で実施した調査研究である。東京都多摩市在住の高齢者を無作為に抽出し、無作為抽出した対象者に郵送法によるアンケート調査を実施した。アンケート調査票の内容は、介護予防に関する周知度や参加状況、IADL、心理的要因、ソーシャル・キャピタルや社会参加などの社会的要因についての調査項目とした。約1800名の対象者より回答が得られ、分析の結果から介護予防の周知度や参加状況には、IADLや心理的要因、社会的要因が多面的に関連していることが明らかになった。今後はデータの分析を進め、介護予防の周知度や参加状況に関連する要因を整理し、介護予防における周知度や参加状況を高めるための課題や有効な方策について検討していく。

### (2) 高齢者の運動機能の判定方法に関する研究

高齢者の運動機能を評価するための運動機能テストは、これまでに数多く報告されており、介護予防の実践の現場などにおいても、すでに広く活用されている。しかし、すでに実践的に用いられている運動機能テストにおいても、結果を簡便に判定するための適切な方法がないのが現状である。本研究では、高齢者に対する運動機能テストの結果を、簡便に判定することができる運動機能判定システムを開発している。現在は、運動機能判定システムを構築するための基礎データとなる、各運動機能テストの参考値の設定を行っている段階である。今後は、システムの構築を進めるとともに、システムの有効性を検証するための実証実験を行っていく予定である。

### 3. 研究業績

#### 【著書】

- 1) 上出直人：介護予防事業における評価の実践ガイド. 完全版介護予防マニュアル. 鈴木隆雄, 島田裕之, 大淵修一（監）, 法研, 東京, 2015, pp.453-478.

#### 【論文】

- 1) Kamide N, Shiba Y: Is complex obstacle negotiation exercise more effective than other exercise interventions in fall-prevention?. *Geriatr Gerontol Int* 15 : 129-131, 2015 [IF : 1.575]
- 2) Nakazono T, Kamide N, Ando M : The reference values for the chair stand test in healthy Japanese older people : Determination by meta-analysis. *J Phys Ther Sci* 26 (11) : 1729-1731, 2014 [IF : 0.198]
- 3) Kamide N, Asakawa T, Shibasaki N, Kasahara Y, Tamada Y, Kitano K, Kikuchi Y, Yorimoto K, Kobayashi Y, Komori T: Identification of the type of exercise therapy that affects functioning in patients with early-stage amyotrophic lateral sclerosis : A multicenter, collaborative study. *Neurol Clin Neurosci* 2 : 135-139, 2014
- 4) 酒井博美, 上出直人, 上月正博 : 自立高齢者に対する音楽を付加した介護予防体操の心理面および継続性への効果 : パイロット研究. *高齢者のケアと行動科学* 19 : 19-31, 2014
- 5) 酒井博美, 上出直人, 上月正博, 市江雅芳 : 地域在住高齢者の抑うつ傾向と音楽への態度・習慣との関連. *日本統合医療学会誌* 7 (1) : 99-104, 2014
- 6) 川畑葉月, 上出直人 : ラベンダー精油によるアロマセラピーは健常成人の認知機能を高める. *Aroma Research* 15 (2) : 174-178, 2014

#### 【学会発表】

- 1) 奥泉宏康, 黒澤一也, 小谷野清, 上出直人, 征矢野あや子 : 周波数を下げた低出力超音波パルスによる施設入居高齢女性の踵骨骨密度の変化. 第18回超音波骨折治療研究会. 2015.01.17. 神戸.
- 2) 奥泉宏康, 黒澤一也, 小谷野清, 上出直人, 征矢野あや子 : 低出力超音波パルスによる施設入居高齢女性の踵骨骨密度の変化. 第16回日本骨粗鬆症学会. 2014. 10.23-10.25, 東京.
- 3) 深瀬裕子, 村山憲男, 河村晃依, 柴喜崇, 上出直人, 田ヶ谷浩邦 : 評定者のエイジズムが投影法の評定に及ぼす影響. 中国四国心理学会第70回大会. 2014.10.25-10.26, 広島.
- 4) 柴喜崇, 上出直人, 河村晃依, 村山憲男, 佐藤春彦, 大淵修一 : 都市部におけるサービス付き高齢者向け住宅居住者の特徴. 日本老年社会科学会第56回大会. 2014.06.07-06.08, 岐阜.
- 5) 村山憲男, 柴喜崇, 河村晃依, 上出直人, 佐藤春彦, 田ヶ谷浩邦, 大淵修一 : バウムテストの諸指標は、高齢者の心理的特徴を反映するか? 高齢者の心理的評価に対する投影法の有用性. 日本認知症ケア学会. 2014.05.31-06.01, 東京.

- 6) 中園哲治, 安藤雅峻, 上出直人: 地域在住日本人高齢者のチェアスタンドテストの基準値－メタ分析による算出－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 7) 安藤雅峻, 上出直人: 日本人高齢者と欧米人高齢者の歩行速度は異なるのか?－メタ回帰分析による検証－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 8) 水野公輔, 柴喜崇, 上出直人, 佐藤春彦, 鈴木良和, 田中悠也, 有阪直哉, 鶴田陽和, 竹内昭博, 福田倫也, 池田憲昭: スマートフォンによる地域在住女性高齢者の運動学的解析－立位・歩行時の姿勢と身体機能に関する加齢変化について－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 9) 北野晃祐, 上出直人, 浅川孝司, 芝崎伸彦, 笠原良雄, 玉田良樹, 菊地豊, 寄本恵輔, 米田正樹, 渡邊宏樹, 川上司, 小林庸子, 小森哲夫: 筋萎縮性側索硬化症患者に対する理学療法プログラム実施に関連する要因－多施設共同研究－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 10) 菊地豊, 上出直人, 北野晃祐, 浅川孝司, 芝崎伸彦, 笠原良雄, 玉田良樹, 渡邊宏樹, 川上司, 米田正樹, 寄本恵輔, 小林庸子, 小森哲夫: 機能障害が進行した筋萎縮性側索硬化症患者に対しては有酸素運動が有益である－多施設間共同研究のデータ分析から－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 11) 上出直人, 浅川孝司, 芝崎伸彦, 笠原良雄, 玉田良樹, 北野晃祐, 菊地豊, 寄本恵輔, 小林庸子, 小森哲夫: ADL障害が軽度な筋萎縮性側索硬化症患者に対して有効な運動療法の検証－多施設共同研究による検証－. 第49回日本理学療法学会大会, 2014.05.30－06.01, 横浜.
- 12) 北野晃祐, 上出直人, 浅川孝司, 芝崎伸彦, 笠原良雄, 玉田良樹, 菊地豊, 寄本恵輔, 小林庸子, 小森哲夫: 多施設共同研究による筋萎縮性側索硬化症患者に有効な理学療法プログラムの検証. 第55回日本神経学会学会大会, 2014.5.21－24, 福岡.

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 文部科学省科学研究費助成事業, 若手研究 (B) : 高齢者の運動機能判定システムの開発とその有効性の検証 (代表者)
- 2) 平成26年度北里大学医療衛生学部特別研究費, 萌芽研究: 筋萎縮性側索硬化症患者の理学療法に関するデータベースの構築 (代表者)
- 3) 2014年度 (後期) 勇美記念財団在宅医療助成: 在宅で生活する機能障害が軽度の筋萎縮性側索硬化症患者に対するホームエクササイズの効果－多施設間共同研究－ (分担者)

## 1. 研究課題

- (1) 新たな住まい方の提案にむけて – 地域解放型共同住宅「荻窪家族レジデンス」
- (2) 後期高齢期における交流媒体としてのSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）

## 2. 研究活動の概要

### (1) 新たな住まい方の提案にむけて—地域解放型共同住宅「荻窪家族レジデンス」

#### ◆概要：

荻窪家族プロジェクトは、地域の誰もがゆるやかにつながり、お互いに多様なサポートや情緒の一体感を交換することで、自分らしく地域で生き続けることを可能にする「百人力」が得られる住まい方を実現する為に、一人の団塊世代の女性の思いから7年前に始まった。試行錯誤の末、地域に解放されたコミュニティスペースをふんだんにもつ集合住宅「荻窪家族レジデンス」を建設するという動きに展開し、2015年3月の竣工を目指し、様々な動きが展開している。

荻窪家族ホームページ <http://www.ogikubokazoku.org/>

ここを地域の拠点として活用して行く為に、どんな仕組みが必要か？これを、定期的に地域内外の人々が集まり、知恵を出し合い、突き詰めてきた。ここに、社会老年学の専門家として関わるなかで、新たなコミュニティづくりに向けた社会実験を行っている。

#### ◆2014年度の取組：

本年度は、このコミュニティスペースを活用するために「大人サロン」の仕組み作りに取り組んだ。「大人サロン」は、単なる地域の貸スペースとしてではなく、地域の交流拠点としての存在を理解する人々に、活用してもらうことを目的に立ち上げたネットワークの総称である。ここでは、近所の茶の間としてコーヒーを飲み立寄れるだけでなく、サロンのメンバーが講座を開催したり、子育て支援の活動に参加したりできる場となっている。さらに、新宿区戸山団地から全国に広がりつつある暮らしの保健室（福祉関連の専門家が常駐し、気軽に相談できる場）の秋山代表の支援を受け、荻窪暮らしの保健室の開設準備中でもある。

さらに、本年度は、このような住まい方、動きをより多くの人々に知ってもらうために、同様の住まい方を実現している2団体と共に自主企画シンポジウム「参加のデザインによる新たな高齢者居住の形」（7/27 杉並区産業商工会館）の開催、マスコミへの積極的な発信を行った。また、若者層の関心を促すことを目的に、クラウドファンディング（<http://wesym.com/ja/projects/ogikubokazoku/>）を展開した。



◆2015年度の展開：

次年度は、これまでの地域内外のメンバーに居住者を加え、地域の交流拠点としての在り方を模索していく。その為に、定期的なミーティングを開催し、居住者主体の住まい方づくりを進めていく。

同時に、今後、縦割りの既存の仕組みでは成立しない「荻窪家族」の住まい方、地域コミュニティづくりの在り方を、論文や学会発表にとどまらず、出版などで発信していく。

(2) 後期高齢期における交流媒体としての SNS (ソーシャルネットワーキングサービス)

◆概要：

社会とのつながりの縮小期にある後期高齢期において、facebookを代表とする SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) がどう利活用されていくのかを明らかにしていく。

2013年度から、企業退職者グループM会が立ち上げたfacebook勉強会において社会実験を行っている。この勉強会は、加齢により直接的な会の活動への関与が困難になるなかで、それを補完する手段としてfacebookを活用していくことを目的に設立された。14名のコアメンバーがfacebook上でクロードなコミュニティをつくり、交流を行っている。

◆2014年度 of 取組：

本年度は、参与観察中を継続していく中で、M会の本拠地のある広島県で開催された総会で、facebook勉強会の取組を紹介し、勉強会の代表と共に参加者を募った。その結果、関西圏に居住するM会から3名の参加者があり、動きが広がりつつある。

◆2015年度の展開：

勉強会の立ち上げから三年目を迎え、会の平均年齢も上がりつつあるなかで、徐々に、罹病、配偶者の介護などにより、直接の関与が困難なメンバーがではじめている。Facebookを介したつながりがどのように機能していくのかを、より深く検証していく。

### 3. 研究業績

【講演】

- 1) 大阪商業大学公開講座 基調講演：超高齢社会のまちづくりは『第三の居場所』創りから (2014) .

【論文】

- 1) 澤岡詩野：都市部の企業退職者の社会活動と社会関係にあるインターネットの位置づけ－後期高齢期にあるシニア情報生活アドバイザー資格取得者の語りから－, 応用老年学, 8 (1), 31-39 (2014) .
- 2) 澤岡詩野・袖井孝子・森やす子・荒井浩道：高齢者の非親族との電子メールを介した交流の特性, 社会情報学, 2 (3), 15-26 (2014) .



## 1. 研究課題

高専賃居住者に対するエンパワーメントを高める取り組みが共助活性化に与える効果

## 2. 研究活動の概要

### 【研究業績】

- ・ 査読ある英語論文1編及び査読有る日本語論文2編を執筆した。
- ・ 神奈川県理学療法士学会における発表演題において〔最優秀学会賞〕を受賞した。

### 【社会貢献活動】

- ・ かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進等委員会の委員としてかながわ県の介護予防事業の推進に従事した。
- ・ かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進等委員会介護予防事業ワーキング部会長（座長）として介護予防事業の施策立案に従事した。
- ・ 「かながわ介護予防・健康づくり運動指導員」養成に携わった。
- ・ 神奈川県座間市においては、一次予防事業としての介護予防サポーター育成に加え、二次予防事業全般にわたり計画・運営に関わった。

## 3. 研究業績

### 【学術賞】

- 1) 田中優人、柴喜崇、水野公輔、佐藤春彦、上出直人、竹内昭博、池田憲昭：地域在住女性高齢者における歩行時の姿勢と安静立位時の姿勢との関係. 第31回 神奈川県理学療法士学会 3.16. (横浜), 2014

### 【論文】

〔学会誌〕

- 1) 植田拓也、柴喜崇、水野公輔、佐藤春彦、渡辺修一郎：新しい脊柱後彎の定量的測定方法の提案－小型ジャイロセンサを用いた測定の再現性および妥当性の検討－. 理学療法学 41 (6) 331－337, 2014
- 2) 佐藤美由紀、山科典子、安齋紗保理、植木章三、柴喜崇、新野直明、渡辺修一郎、花里陽子、

芳賀博：都市部の地域包括ケアシステム構築における課題と方策－行政および在宅医療の視点から－. 応用老年学 8 (1) 63-73, 2014

- 3) Naoto Kamide, Yoshitaka Shiba : Is complex obstacle negotiation exercise more effective than other exercise interventions in fall prevention?. Geriatr Gerontol Int 15 (1) , 129-131, 2015

〔総説・講座〕

- 1) 柴喜崇、渡辺修一郎：地域在住高齢者における加齢に伴う生活機能の変化およびその予防の考え方. 「Aging in Place を見据えた高齢者に対する予防戦略」. 理学療法学 41 (5) 320-327, 2014  
2) 大淵修一、柴喜崇：老年症候群の理学療法評価. 理学療法ジャーナル 48 (5) 385-395, 2014  
3) 柴喜崇：パーキンソン病に罹患している人々の予防的早期運動介入は障害進展予防となる. 理学療法－技術と研究－ 43, 1-4, 2015

### 【著書】

- 1) 柴喜崇、山科典子、上出直人、河村晃依、芳賀博（分担執筆）北里大学医療衛生学部、桜美林大学加齢・発達研究所、相模原市（監修・編著）：公営住宅在住高齢者における日常生活と健康に関するアンケート調査 報告書. 学校法人 桜美林学園 桜美林大学加齢・発達研究所 6月, 2014

### 【学会発表】

〔シンポジウム〕

- 1) 柴喜崇：パーキンソン病に罹患している人々への早期介入による障害進展予防か可能か？. 第1回 Saga Neurology Conference 9.27（佐賀 ホテルマリタール創世）、座長 原英夫, 2014

### 【学会発表】

〔一般講演〕

- 1) 柴喜崇、上出直人、河村晃依、村山憲男、佐藤春彦、大淵修一：都市部におけるサービス付き高齢者向け住宅居住者の特徴. 日本老年社会科学会第56回大会, 6.7-6.8, (岐阜県下呂), 2014  
2) 村山憲男、柴喜崇、河村晃依、上出直人、佐藤春彦、田ヶ谷浩邦、大淵修一：バウムテストの諸指標は、高齢者の心理的特徴を反映するか？. 第15回日本認知症ケア学会大会, 5.31-6.1, (東京国際フォーラム), 2014  
3) 深瀬裕子、村山憲男、河村晃依、柴喜崇、上出直人、田ヶ谷浩邦：評価者のエイジズムが投影法の評定に及ぼす影響. 中国四国心理学会第70回大会 10.25-26. (広島大学大学院教育研究科), 2014  
4) 安齋沙保理、佐藤美由紀、柴喜崇、吉田裕人、芳賀博、植木章三：都市部在住高齢者における痛みに対する行動的対処方略とIADLの関連. 第73回日本公衆衛生学会総会 11.5-7 (宇都宮), 2014  
5) 植木章三、吉田裕人、犬塚剛、片倉成子、安齋沙保理、柴喜崇、芳賀博：地域高齢者の介護予防等の活動への参加状況等からみた積極的な高齢リーダーがいる意義. 第73回日本公衆衛生学

会総会 11.5-7 (宇都宮), 2014

- 6) 山科典子, 柴喜崇, 渡辺修一郎, 新野直明, 植木章三, 芳賀博: 高齢者の福祉用具使用状況 - 無作為標本抽出による実態調査 -. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 7) 植田拓也, 柴喜崇, 栗原翔, 前田悠紀人, 渡辺修一郎: 自主参加型体操グループへ参加している地域在住高齢者における腰痛・膝痛の有無と運動機能および精神的健康の関係. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 8) 水野公輔, 柴喜崇, 上出直人, 佐藤春彦, 鈴木良和, 田悠也, 有阪直哉, 鶴田陽和, 竹内昭博, 福田倫也, 池田憲昭: スマートフォンによる地域在住女性高齢者の運動学的解析 - 立位・歩行時の姿勢と身体機能に関する加齢変化について -. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 9) 畠山浩太郎, 植田拓也, 前田悠紀人, 柴喜崇: 運動習慣のある地域在住中高齢者における運動非継続者の特徴. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 10) 井口大平, 張振志, 齋藤崇志, 大沼剛, 阿部勉, 大森豊, 柴喜崇: 訪問リハビリテーションを利用している要介護者に対する主介護者の介護負担感に影響する因子. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 11) 栗原翔, 植田拓也, 前田悠紀人, 畠山浩太郎, 中村諒太郎, 柴喜崇: 自主参加型体操に継続参加し転倒自己効力感が向上した男性高齢者は, 精神的健康が向上する. 第49回日本理学療法学会大会, 5.30-6.1, (横浜), 2014
- 12) 大沼剛, 橋立博幸, 張振志, 阿部勉, 井口大平, 齋藤崇志, 柴喜崇: 訪問リハビリテーションを利用する在宅要介護者の屋内生活空間の身体活動と生活意欲・動作能力との関連. 第33回関東甲信越ブロック理学療法学会大会, 10.25-26 (千葉), 2014

#### 【その他の活動】

〔公開講座〕

- 1) 柴喜崇: 運動器機能の向上. 神奈川県介護予防従事者研修会 1.17. (横浜リハビリテーション専門学校), 2014
- 2) 柴喜崇: 運動器機能の向上. 神奈川県介護予防従事者研修会 2.7. (国際医療福祉大学 小田原キャンパス), 2014

〔大衆伝達〕

- 1) 柴喜崇: 27年間継続 東林の朝体操. タウンニュース さがみはら南区版 No1179, 5.29, 2014

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 柴喜崇 (研究分担者), 植木章三 (研究代表者): 地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案. 平成23年度-28年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 基盤研究 (B)), 2013-

## 1. 研究課題

- (1) 日系米国人としての経験が、生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉え方に与える影響についての研究
- (2) 米国のアドバンス・ディレクティブズと高齢者についての研究
- (3) 平成26年度児童福祉問題調査研究事業 「諸外国の生殖補助医療における出自を知る権利等の取扱いに関する研究」
- (4) 厚生労働科学研究費補助金、成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 「生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究」

## 2. 研究活動の概要

### (1) 日系米国人としての経験が、生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉え方に与える影響についての研究

昨年度に引き続き、米国カリフォルニア州のサンノゼ市に住む日系アメリカ人高齢者にインタビューを実施し、日系人としてのアイデンティティが、彼らの生き方や考え方、エンド・オブ・ライフの捉えかたにどのような影響を与えているかについて調べている。現在、12名のインタビューを終え、データをまとめている。調査対象者はすべて80代、90代の男女で、多くが日系2世であり、ほとんどの人が英語を主要言語としている。全員、健康状態は良好で、ほとんどの人が今も、子などに頼らず、自律した生活を営み、ボランティア活動に参加したり、教会の活動に参加している。日本の文化や自分が日本人の血をひいていることを非常に意識しつつも、自身をアメリカ人と捉えている。しかし彼らのアクティブな生活は、日系人コミュニティーに大きく支えられているように思われる。対象が限られているため、バイアスはあると思われるが、現在の対象者をみる限り、日系人としての支え合いが、日本よりも独居状態にある高齢者の孤立感を減少させているように思われる。

### (2) 米国のアドバンス・ディレクティブズと高齢者についての研究

近年、日本では「終活」や「エンディング・ノート」がメディアなどでも取り上げられているが、自分の人生の最期のケアについての希望を示すアドバンスケア・ディレクティブズ（リビング・ウィル）が米国の高齢者にはどのように受け止められているのかについて調査した。この調査についての結果は、老年学研究科の2014年度 春季公開講座 「エンド・オブ・ライフを考え

る」で報告した。米国にはアドバンスケア・ディレクティブズに関する法律もあり、日本よりも、自分の人生の最期の医療指示書等を用意している高齢者が多く、高齢者施設や定期検診などでこうした指示書の重要性を啓発するような機会も、日本に比べてはるかに多い。この調査は、早稲田大学のアドバンスケアプランニング研究会の研究者と情報交換しながらすすめた。

**(3) 平成 26 年度児童福祉問題調査研究事業 「諸外国の生殖補助医療における出自を知る権利等の取扱いに関する研究」**

厚生労働省の事業である上記研究において、アイルランド・ベルギー・ドイツ・アメリカ・カナダを担当している。担当している各国の研究者に研究協力を得ながら情報収集するとともに、2015年2月には、これらの国に実際に訪れ、生殖補助医療を利用した親や生まれた人、産婦人科医やソーシャルワーカー等にインタビューを実施し、これらの国において、第三者の関与する生殖医療で生まれた人たちの生物学的親を知る権利についての調査をすすめた。現在、これについての報告書をまとめているところである。

**(4) 生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究**

厚生労働科学研究費補助金、成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業である上記研究において、東京医科大学産婦人科教授の久慈直昭教授の研究協力者として、主にドイツについて調査研究した。2014年7月にはドイツ、ミュンヘン、フライブルグ、フランクフルトで、当事者、研究者に会い、情報収集した。現在報告書は印刷中である。

### 3. 研究業績

#### 【論文】

- 1) 仙波由加里、久慈直昭、清水清美、AID出生者とドナーの情報自主登録制とドナーリンキングーオランダのフィオムの活動を参考にー 『生命倫理』25巻(2014年9月)60-67頁。
- 2) 久慈直昭、仙波由加里、清水清美、厚生労働科学研究費補助金、成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 「生殖医療の新たな枠組み構築～非配偶者間人工授精における告知と出自を知る権利に関する研究」報告書、印刷中。

#### 【学会発表】

- 1) 日本生命倫理学会第26回年次大会 「第三者の関わる生殖医療に関する諸外国の法的対応」、(2014年10月25日(土)アクトシティ浜松コンgresセンター)
- 2) 第59回日本生殖医学会シンポジウム8 『提供配偶子により出生した子のテリング』(2014年12月5日(金)京王プラザホテル)

#### 【その他の研究活動】

- 1) 桜美林大学大学院 老年学研究科 2014年度 春季公開講座 「米国のアドバンス・ディレクティブズと高齢者」(2014年5月17日(土)桜美林大学四谷キャンパス)
- 2) NHK「いのち」をめぐる議論のためのページ(「インターネットドキュメンタリー・地球法廷 ～生命操作～」1999年NHKBS)復刻版、監修。4月1日にNHK福祉番組班のホームページ“ハートネット”では、<http://www.nhk.or.jp/heart-net/>に掲載される予定。

## 1. 研究課題

- (1) 社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について
- (2) 触法高齢者・障害者の地域生活定着促進のための効果的支援方法の開発事業
- (3) 地域包括ケアシステム構築に向けた日常生活圏域ニーズ把握のための調査研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について

日本生命財団より研究助成を受けて、①コミュニティソーシャルワーカー（CSW）を対象とする郵送調査（2013年8月～9月、有効回答票数408票、有効回収率38%）を行い、活動の実態、孤立支援の状況、CSWの課題等を明らかにした。調査結果を踏まえて、②CSWの社会的孤立支援の効果を明らかにするためのフォーカスグループインタビューを豊島区と飯能市のCSW配置地域と未配置地域において、4グループ（各8人）に対して実施した。結果を日本地域福祉学会大会（2014年6月）、日本社会福祉学会大会（2014年11月）で報告したほか、報告書にまとめた。

### (2) 触法高齢者・障害者の地域生活定着促進のための効果的支援方法の開発事業

社会福祉法人 社会福祉事業研究開発基金（三井信託銀行）の2014年度助成金を得て、矯正施設出所後も再犯を繰り返す高齢者や障害者が地域に定着できるようにするための効果的な支援のあり方について調査研究に取り組んだ。共同研究者である山口県立大学の教員とともに、①「山口県地域生活定着支援センター」へのヒアリング調査、②特別調整の支援を受けた人へのインタビュー調査を行った。さらに、③「地域生活定着支援センター」の職員を対象として、業務の実態、必要な専門性や研修、多機関連携、課題などを明らかにするための調査を行った（2014年12月、有効回答票75票、有効回収率31%）。現在、分析中である。

### (3) 地域包括ケアシステム構築に向けた日常生活圏域ニーズ把握のための調査研究

栃木県市貝町において、在宅高齢者を対象とする「日常生活圏域ニーズ調査」を実施し、分析を行った。この調査は、第6期介護保険事業計画のためのニーズ把握調査であり、厚生省によりモデル調査票が示されているが、町が希望する項目も加えて、2014年5月に郵送による悉皆調査



を行った。有効回収票数1,884票、有効回収率69.1%であった。「一般（元気）高齢者」が58.7%、「二次予防対象者」が29.8%、「要支援者」が3.7%、「要介護1,2」が5.0%、「要介護3,4,5」が2.8%、認知症及びその疑いのある人は25.8%であることが判明した。詳細は報告書にまとめた。

### 3. 研究業績

#### 【論文】

- 1) 中野いく子 「2013年度学界回顧と展望；高齢者福祉部門」『社会福祉学』第55第3号 2014 pp.205-219

#### 【学会発表】

- 1) 田中秀樹・国光登志子・高橋信幸・中野いく子「コミュニティソーシャルワーク実践の現状・評価・課題：コミュニティソーシャルワーク実践者に関する調査より」日本地域福祉学会 第28回大会 2014年6月15日 島根県・島根大学
- 2) 田中秀樹・高橋信幸・中野いく子「社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方に関する研究－都市部・山間部2地域のFGI調査を基に－」日本社会福祉学会 第62回秋季大会 2014年11月30日 東京・早稲田大学

#### 【調査研究報告書】

- 1) ソーシャルワーク実践研究会（代表研究者 田中秀樹）『社会的に孤立しがちなひとり暮らし高齢者等へのコミュニティソーシャルワークによる支援のあり方について 報告書』（ニッセイ財団 平成24年度・25年度（継続）高齢社会実践的研究助成事業） 2014年9月 pp.1-244

#### 【助成金】

- 1) 社会福祉法人 社会福祉事業研究開発基金（三井信託銀行）  
触法高齢者・障害者の地域生活定着促進のための効果的支援方法の開発事業  
（分担研究者）（2014年度 50万円 代表研究者 大橋謙策）

#### 【その他の研究活動】

- 1) 中野いく子「地域包括ケアの推進を目指して」『学術の動向1 2015』（公財）日本学術協力財団 pp.75-79 2015  
（日本学術会議 健康・生活科学委員会高齢者の健康分科会 シンポジウム「高齢者が安心して暮らせる健康コミュニティを目指して」2014年7月5日 桜美林大学）



## 1. 研究課題

高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究

## 2. 研究活動の概要

高齢期はうつ病になりやすい要因が増える時期であり、うつ病は自殺と関係する病気として高齢期の最も重要な精神健康問題である。しかし、予防重視型介護予防施策では、うつリスクのある高齢者に対する対策が遅れている。本研究は、地域高齢者を対象としたうつ予防・支援のため、応用可能な新たなポピュレーションアプローチ方法を提供することを目的とする。ポジティブ心理学的アプローチを主なツールとしたうつ予防プログラムの有効性について、抑うつ状態およびその他のメンタル面に及ぼす短期、中長期的な影響について検討する。

本年度は昨年度に加え新たに2つの自治体においてうつ予防事業として導入し、効果検証を行った。また、従来の対象者に対し、各自治体の協力において、予防データ（要介護認定状況、死亡状況）と事業費などのデータ収集し、継続的なデータベースの構築を行った。

結果概要：学会等の活動について2つの学会において3演題の発表を行った。高齢者のうつ状態に対するうつ予防プログラムの中長期的な効果検証の結果は自治体のうつ予防事業評価として、中長期的な効果が実証できた。本プログラムを実施することにより、高齢者のうつ状態、不眠、不安の改善が明らかになり、さらに幸福感の向上が見られた。また、1年後の追跡期間中にその効果は維持されていることが明らかになった。さらに、都市部、地方自治体両地域での効果について比較研究を行った結果、高齢者のうつ予防プログラムの介入が異なる地域においてもその有効性示された。よって、高齢者向けのうつ予防プログラムとして幅広い地域で応用できることが示された。

以上の研究活動により、高齢者を対象にした（一次予防対象者、二次予防対象者）うつ予防プログラムの効果を学術的な評価を行い、さらに学術誌に投稿する準備を進めている段階である。

2014年度の研究実施状況は、東京都のF市、新潟県のN市、神奈川県Y市の3自治体においてポピュレーション版うつ予防教室を5教室、東京都K区においてハイリスク版のうつ予防教室2教室合計7教室実施した。普及啓発活動として、高齢者向けの講演会2回、研修会を3回、対象者向け結果報告会3回、自主グループの合同会2回実施した。

2015年度は勤労者への介入効果を検証し、早いうちからのメンタルヘルス維持と向上に有益なエビデンスを提供する。また、自治体の事業への定着や継続的なサポートを行いながら、実証研究を継続する。

### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 兪今：うつリスクを有する地域高齢者のうつ状態のリスク要因. 第29回日本老年精神医学会；東京2014
- 2) 兪今、安順姫、新野直明、芳賀博：高齢者のうつ状態に対するうつ予防プログラムの中長期的な効果検証. 第73回日本公衆衛生学会総会；栃木2014
- 3) 安順姫、兪今：地域高齢者向けうつ予防プログラムの介入の実証効果. 第73回日本公衆衛生学会総会；栃木2014
- 4) 兪今：うつ予防プログラムの介入効果についての実証研究－都市部と地方の自治体における効果検証－.日本健康心理学会第27回大会；沖縄2014
- 5) 兪今、安順姫、兪峰、張慶鎬：中国東北農村地域における高齢者のうつ症状に関する縦断的研究. 第79回日本民族衛生学会；筑波2014
- 6) 安順姫、兪今、兪峰、張慶鎬（中国延辺大学）：中国吉林省農村在住高齢者の心理的幸福感とその関連要因－2年間の縦断調査による検討－. 第79回日本民族衛生学会；筑波2014

#### 【科研費などの助成金】

- 1) 高齢者のうつ予防のためのポピュレーションアプローチの実証研究（文部科研・代表）

#### 【その他の研究活動】（報告書・発行物）

- 1) 兪今：平成25年度府中市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告書（2014.6）
- 2) 兪今：平成25年度府中市介護予防事業「うつ予防教室」の事業評価報告書（2014.12）
- 3) 兪今：平成23年度－平成25年度府中市介護予防事業「うつ予防教室」の事業評価報告書（2015.1）
- 4) 兪今：平成26年度府中市介護予防事業「ハッピー教室」実施報告書（2015.3）
- 5) 兪今、安順姫：「中国農村地域における高齢者の健康度の実態」ダイヤニュース， No76：P10－12：2015
- 6) 兪今：「高齢者の抑うつ症状発症に影響する危険（リスク）要因」. ダイヤニュース， No80；P3－6：2015

## 1. 研究課題

高齢者自身による学習機会の創造とその運営

## 2. 研究活動の概要

高齢者自身による学習機会の創造・運営者が成功した事例を取り上げ、その成功要因を、明らかにすることを目的に活動の設立・運営者を対象に質的調査を行った。

分析で得られた11の成功要因のうち、高齢者自身による団体の立ち上げの大きな動機となり、その思いが自己実現につながり、活動を継続する意欲につながっていた3つの要因に着目し、高齢者自身による学習機会の創造に特有の成功要因を取り入れた高齢者の社会活動のためのプログラム作成、その実施方法を検討している。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 青木典子、杉澤秀博 「高齢者自身による学習機会の創造と運営」ポスター発表 日本老年社会科学会 第56回大会研究発表要旨集, 184, 下呂交流会館 2014年6月

### 【その他の研究活動】

#### 1) 情報収集活動

- ・ 2014 Positive Ageing Journey Brisbane
- ・ Australia Women's Health & Wellbeing Expo
- ・ Gold Coast Senior week 2014
- ・ Seniors Health & Lifestyle Expo
- ・ ゴールドコースト リタイアメントビレッジ 視察
- ・ 「平成27年国勢調査の5つのポイントと12の新たな取り組み」統計調査員研修
- ・ 「コミュニティーで創る新しい高齢社会のデザイン」  
主催 独立行政法人科学技術振興機構 よみうり大手町ホール
- ・ 地域福祉サポーター

## 1. 研究課題

- (1) 要支援・要介護高齢者の主観的健康感の実態とその関連要因の検討

## 2. 研究活動の概要

### (1) 要支援・要介護高齢者の主観的健康感の実態とその関連要因の検討

過去に実施した訪問リハビリテーション利用者を対象とした調査研究をまとめ、主観的健康感の関連要因について国際学会を含む学会発表を行った。

また要支援・要介護高齢者の主観的健康感と尿失禁との関連ならびに「情緒的サポート」や「孤独感」の心理・社会的要因との関連についてまとめたものを学術誌に投稿し査読を受けている。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 「在宅要介護高齢者の主観的健康感と関連する自覚症状とその特徴－認知機能が正常～軽度低下した高齢者への調査－」池田晋平、内田恵美子、芳賀博  
第15回日本認知症ケア学会大会  
平成26年6月5月31日～6月1日
- 2) 「Self-Rated Health and Aging in Place－The Role of Physical Functions and Lifestyle Factors among Frail Older Adults－」Shinpei Ikeda, Emiko Uchida, Hiroshi Haga  
16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists  
平成26年6月18日～21日 Yokohama, Japan

### 【その他の研究活動】

- 1) 平成26年10月～11月、都内の訪問看護ステーションの協力を得て調査研究を実施した。テーマは「訪問リハビリ利用者の主観的健康感の実態とその関連要因」で、訪問リハビリテーションを利用する在宅要支援・要介護高齢者を対象に、主観的健康感の関連する要因を検討したものである。本研究の成果については、平成27年6月19日～21日に開催される「第49回日本作業療法学会」にてポスター発表することが決まっている。

## 1. 研究課題

- (1) 地域在住高齢者の介護予防に関する観察研究
- (2) 円背の定量的測定方法についての研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 地域在住高齢者の介護予防に関する観察研究

運動習慣のある地域在住高齢者のグループについての体力測定及び質問紙調査を実施し、グループへの参加中止についての要因や精神的健康についての多面的な分析を実施した。この調査は今年で6年目（6回目）の実施となり、平成27年度も、7回目の調査を実施する予定である。

### (2) 円背の定量的測定方法についての研究

簡便に測定が可能な円背の定量的測定方法を開発し、測定の信頼性および妥当性について論文を執筆した。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 植田拓也, 柴喜崇, 水野公輔, 佐藤春彦, 渡辺修一郎: 新しい脊柱後彎の定量的測定方法の提案 - 小型ジャイロセンサを用いた測定の再現性および妥当性の検討 -. 理学療法学41(6), 331-337, 2014

### 【学会発表】

- 1) 植田拓也, 柴喜崇, 栗原翔, 前田悠紀人, 渡辺修一郎: 自主参加型体操グループへ参加している地域在住高齢者における腰痛・膝痛の有無と運動機能および精神的健康の関係. 第49回日本理学療法学会大会(横浜), 2014
- 2) 畠山浩太郎, 植田拓也, 前田悠紀人, 柴喜崇: 運動習慣のある地域在住中高齢者における運動非継続者の特徴. 第49回日本理学療法学会大会(横浜), 2014
- 3) 栗原翔, 植田拓也, 前田悠紀人, 畠山浩太郎, 中村諒太郎, 柴喜崇: 自主参加型体操に継続参加し転倒自己効力感が向上した男性高齢者は, 精神的健康が向上する. 第49回日本理学療法学会大会(横浜), 2014

## 1. 研究課題

- (1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の役割

## 2. 研究活動の概要

### (1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の役割

修士論文を加筆・修正した上で「厚生指標」に投稿した結果、雑誌に掲載された。さらに、この課題を深めるため、要介護度の重度化が進む特別養護老人ホームの入所者に対して機能訓練指導員がどのような取り組みや手法をとっているかについて、機能訓練指導員8名に対して質的調査を行い分析した。現在、分析結果に基づき投稿原稿を作成中である。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 植田大雅・杉澤秀博 (2014) 「特別養護老人ホームにおける機能訓練指導員による仕事の創造」『厚生指標』61(4) : 35-42.

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者の居場所の研究
- (2) 高齢者の健康生活診断指標に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者の居場所の研究

#### 1) 福祉センターを居場所とする高齢者の過ごし方の実態

高齢者が日中過ごす場所や、過ごす場所での居心地、過ごし方と健康との関連について継続して研究している。高齢者が利用できる自由性の高い日中過ごす場所のひとつである「福祉センター」をフィールドとして高齢者が自宅以外のもう一つの居場所での健康で過ごすための支援について追及している。

「老人福祉センターを利用することによる『よりよい健康』を維持する効果」(2009)、高齢者の利用状況や過ごし方における利用継続の可能性(2010)、老人福祉センター利用のきっかけとなる動機(2011)を基盤として福祉センターを居場所とした高齢者がこれらの研究を発展させるために、高齢者の過ごす場所(居場所)の先行研究をふまえた課題を考察し「高齢者を対象とした居場所の研究の実態と課題」(2013)を学会で発表し、現在「福祉センターを居場所とした高齢者の過ごし方の実態」の投稿準備をしている。

#### 2) 地域で継続して過ごすための場所 「暮らしの保健室」の実現に向けて

地域で継続して安心して過ごすため身近に健康や介護、暮らしの中にある疑問の相談できる場所「荻窪暮らしの保健室」の立ち上げに関与し、保健医療福祉職及び老年社会学の専門家とともに「杉並区荻窪に住まう高齢者を含めた人の暮らし」について地域性をふまえた必要なサポートを検討し介入準備を進めている。

### (2) 高齢者の健康生活指標作成に向けての研究

「高齢者生活診断の指標の作成にむけての研究」を共同研究者として聖路加看護大学老年看護研究会に参加し、介護支援専門員を対象として高齢者への質問表内容について表面妥当性の検討(2010)、高齢者を対象として質問表内容の使用感についてインタビュー(2011)、「高齢者の健康生活診断の診断指標およびウェルネス型アセスメントの枠組みに関する研究：診断表の作成と有用性の検討」(2012)を学会で研究協力者として発表した。現在、生活診断指標の作成工程(デルファイ法)と、診断指標の妥当性の検討について投稿準備が進んでいる。



### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 上野佳代、長田久雄、菊池和美；交通機関優先座席で「携帯電話の電源を切る・切らない」  
その理由－ペースメーカーを有する高齢者が安心して交通機関を利用するために－  
第56回日本老年社会科学会；下呂（2014）

## 1. 研究課題

- (1) 地域スポーツ推進計画に基づくスポーツ実施率増加プロセスに関する実証研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 地域高齢者におけるスポーツ実施率増加プロセスに関する実証研究

東京都あきる野市における「生涯学習に関する市民アンケート」を活用して、住民協働により策定したスポーツ推進計画のプロセス評価を試みた。

日本公衆衛生学会において、スポーツ実施率の関連要因を横断研究により検討し、スポーツ実施率の関連要因として、1.健康状態が良好なこと、2.体力に自信があること、3.運動不足を感じていないこと、4.肥満について感じていないこと、5.健康のために生活習慣に気をつけていること、6.スポーツや運動をするのが好きなことが認められた。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 江川賢一：2014 住民協働によるスポーツ推進計画に基づく健康なまちづくり－スポーツ実施率の要因－. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 61巻10号特別附録, p.199.

### 【その他の研究活動】

2014年5月より東京都あきる野市スポーツ審議会委員長に就任し、スポーツ振興施策の企画に従事。生涯スポーツの行政評価に専門的立場から助言。また、2014年7月より日本健康教育学会代議員、学術委員会委員に就任し、政策提言に向けた健康施策評価に着手した。

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者とメディア
- (2) 高齢者とコミュニケーション

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。また、寝たきりや痴呆・介護など、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活情報を紹介する。

### (2) 高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションをはかるときの効果的な音声表現について研究し、その成果を発信する。

## 3. 研究業績

### 【講演】

- 1) 「話し方とコミュニケーション」 (2014.4 杉並区ロータリークラブ)
- 2) 「自分を伝える話し方」 (2014.10 青森県高等学校校長会)
- 3) 「自分を伝える話し方」 (2015.1 青森シニアカレッジ)

### 【セミナー他】

- 1) 「伝わる話し方」 (6/12 子ども宝仙大学)
- 2) 「自分を伝えるために」 (2015/1/23 東京世田谷区MJワークス主催)

### 【執筆】

- 1) デーリー東北 私見創見
  - ① 「うまく話すには～エンダールールのすすめ」 (6/22)
  - ② 「心をふるさとに運ぶ力」 (7/27)
  - ③ 「長寿社会ニッポン～“華齡”な人々から学ぼう」 (8/31)
  - ④ 「別れ際は笑顔で手を振ろう」 (10/5)

- ⑤「未来拓く言葉を大切に」(11/9)
- ⑥「時を経て気づく大切な時」(12/14)
- ⑦「若返るシニア～“65歳以上”は高齢者にあらず」(2015/1/23)
- ⑧「十五の春の記憶」(2015/2/22)

#### 【メディア出演・掲載】

- 1) 青森テレビ「おしゃべりハウス」出演、東奥日報、陸奥新報、通信文化新報などにインタビュー記事、紹介記事

#### 【番組制作】

- 1) 「聞いて聞かせて」(NHKラジオ第二放送)
  - ①「言葉で伝える写真 写真家・尾崎大輔さん」(9/21放送)

視覚障害者や高齢者などにむけた写真教室を取材。特殊な凹凸プリンターによって写真を浮き出させることで、障害者や高齢者に触って楽しんでもらっていた。新たな写真の楽しみ方を紹介。
- 2) 「視覚障害ナビラジオ」(NHK第二放送)
  - ①「リスナーとともに」(11/16放送)

NHKの「盲人の時間」放送50周年を記念した特別番組。視覚に障害のある高齢者の日常を取材。同時にリスナーからのお便りも募集して放送。
  - ②「踏み出す一歩、広がる世界 ラジオDJ 薮より子さん」

阪神大震災で被災した自らの経験をもとに、障害者や高齢者らに必要な情報を発信している女性を紹介。
- 3) 「ラジオ深夜便」(NHKラジオ第一放送)
  - ①「娘の心を伝え続けて 堀祐吉さん」(6/22)
  - ②「豊かな老後を支えたい 東北大学客員教授・村田裕之さん」(9/23)
  - ③「鶴と亀の里から～高齢者をモデルにフリーペーパーづくり・小林直博さん」(9/14)
  - ④「知ってほしい盲ろう者の世界 盲ろう者通訳・渡井真奈さん」
  - ⑤「バリアフリーワークショップ20年 振付家・香瑠鼓さん」

#### 【その他の業績】

大学の授業内で、高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施

- 1) 麻布大学「口述表現」
- 2) 桜美林大学「口語表現Ⅰ」
- 3) 東京国際大学「キャスター演習Ⅰ」
- 4) フェリス女学院大学「放送文化と制度」
- 5) 放送大学「スピーチとコミュニケーション」

## 1. 研究課題

(1) 介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究

## 2. 研究活動の概要

(1) 介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究

①先行研究の検索

過去5年間の先行研究を検索し、その内容について整理した。しかし、文献検索ツールが医学中央雑誌に偏ってしまい、先行研究の一部のみの検索にとどまった。

②調査票の見直しについて

研究対象者が増えることで統計学的にデータ分析ができるよう、前回使用した調査票を使用し、データの蓄積ができるように見直した。

③調査対象施設の拡大について

内諾を得ていた介護老人福祉施設2施設において、調査時期を先送りにしたいとの意向があり、日程調整の上、改めて依頼することとした。

④今後の研究活動について

痰吸引等医療的ケアに関する介護職と看護職の協働に着目した研究も増えてきているが、やはり根本にはお互いの職種への理解と歩み寄りが必要であるとの意見が多いと感じる。今後、2職種間の協働に関する課題を整理するとともに、協働が円滑になるための指針となるようなキーワードも合わせて抽出できるようにしていきたい。

## 3. 研究業績

特になし

## 1. 研究課題

高齢者の就業継続の成功要因

## 2. 研究活動の概要

### (1) 高齢期における就業継続の成功例に共通する要因についての研究活動

- ・桜美林大学院 老年学研究科 秋季公開講座〔仕事を通じて生涯現役で活躍するために必要なこと〕にて講演
- ・テーマ：できるだけ長く職業生活を継続できる秘訣
- ・目的：現代社会において、働く意欲のある高齢者が培った能力や経験を生かし、生涯現役で活躍することが求められているが、現実には、高齢者が仕事を通じて生涯現役を目指そうとしても、様々な困難や問題に直面している。それらの困難や問題をどのように乗り越え、克服していけばよいのかを共に考える。
- ・内容：高齢期における就業継続の成功例に共通する要因
  - 要因1. 現役時代のキャリアに対する強い自己肯定感
  - 要因2. 人生の軌道修正力（終わったものと始まったものとの向き合い）
  - 要因3. 技能の更新と就業実現機会の引き寄せ行動

### (2) シニアライフ研究会における研究活動

- ・長田久雄教授のもとでの自主的な勉強会「シニアライフ研究会」において、高齢社会の中で働くシニアライフの課題を研究対象とし、個人と企業双方の視点から、産学協力する形を目指し、活動している。

### (3) NPO 法人戦略的 CSR 研究会における研究活動

- ・戦略的なCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）の実践を広めるNPO法人の理事として、今年度は、「障がい者雇用」に関する研究及び、公開セミナーの開催を中心に活動。その中で、障がい者雇用においても、障がい者の高齢化というテーマについて研究をはじめている。

## 3. 研究業績

上記、各活動に専念。

## 1. 研究課題

アンチエイジング栄養セミナー実施

## 2. 研究活動の概要

### アンチエイジング栄養セミナーの実施（華学園栄養専門学校主催・台東区市民公開講座）

高齢者の多くは、テレビ等のマスメディアの過大なPRにより、断片的な栄養知識をもっているものの、基礎的な栄養教育を受けた経験が少ないことで、疾病予防や健康維持のための基本的な食生活の知識や実践手法を十分にもたない人が多い。本事業は、地域高齢者の自立した食生活を支援するため、栄養知識や料理の工夫などの教育手法を取り入れた健康づくり教室を実施することで、栄養専門学校の利点を活かして地域高齢者の健康づくりに貢献するものである。

年3回にわたり地域高齢者（平均年齢70.4±8.4歳）延べ20人に管理栄養士科学生延べ13人とともに「食生活や栄養に関する講習会」を実施した。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 久喜美知子, 岡本裕子, 後藤道子, 村田淳子, 横山伊都, 新野直明: 相模原市における栄養士地域活動, 日本栄養改善学会, 平成26年8月21日, パシフィコ横浜 1F展示ホール

### 【その他の研究活動】

- 1) 相模原市桜まつり

相模原市民まつりのイベントに相模原市栄養士会役員として参加

日時: 平成26年4月6日(日) 午前10時から16時

場所: 相模原市役所さくら通りにテントブースを設置

内容: 体脂肪測定や生活習慣病予防のリーフレットを配布しながら栄養相談

- 2) 第5回食育フェア(相模原市主催)

相模原市食育推進計画に基づいて実施したイベントに相模原市栄養士会役員として参加

日時: 平成26年11月1日(土) 午前10時から15時

場所: JR横浜線橋本駅近くのアリオ橋本1階「アクアガーデン」

内容: クイズラリーと塩分官能ソルセイブ検査と薄味料理の栄養相談



3) ママの食育講習会

日時：平成26年6月19日（木）午前11時から12時

場所：鳩川幼稚園

内容：幼児の健康づくりと食生活について

## 1. 研究課題

- (1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究
- (2) 高齢者の運動とストレスの研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究

本研究は、当プログラムの効果を明らかにすることを目的とした。コミュニケーションの本質である精神的活動能力を目的とした「人間関係力向上プログラム群」（実験群）と、基礎的な援助技術の習得を目的とした「一般ワーク群」（統制群1）を設けると共に、座学形式の他授業を受講する学生を「一般授業群」（統制群2）とした。その結果、実験群は、自分らしくある感覚を測定した「本来感」と、「社会的情動スキル尺度」を構成する4下位尺度のうち、「周囲との一体感」「自己の強み活用」「他者感情の気づき」で、統制群との違いが認められた。従って、実験群が体験した「人間関係力向上プログラム」は、コミュニケーション力の本質的な部分である精神的活動能力を強化するプログラムとして効果があることが認められた。しかし、「自己感情への気づき・表現」については、すべての群との違いが認められなかった。2回という少ない介入で社会的スキルを獲得することは難しいと推測される。今後は、介入プログラムの実施回数を増やすなどして継続的に行い介入時期やエクササイズの内容の検討も必要である。また、心理指標によるプログラムの効果測定だけでなく、自由記述を含めた質的な検討と、その結果も加味した独自の尺度開発が期待される。

### (2) 高齢者の運動とストレスの研究

高齢者の認知症予防のための運動を行うことで、ストレスや不安の軽減、その関連性などのデータ収集中である。また、「人間関係力向上プログラム」を活用した認知症予防プログラムの開発も検討している。

### 3. 研究業績

#### 【著書】

- 1) はじめて学ぶ心理学 (株) 大学図書出版  
心理学入門のテキストとして、臨床心理学から実践活動での心理臨床的援助と、心理アセスメントとカウンセリングや心理療法の章を担当した。

#### 【論文】

- 1) 野村知子・久米喜代美・石川利江・友永美帆・松田与理子・坂田澄・島津淳・谷内孝行  
(2014) 相談援助の基礎学習としての「人間関係力向上プログラム」の実施と効果に関する報告 OBIRIN TODAY、14、103-117.

#### 【その他の研究活動】

- 1) 人間関係力向上プログラムの実施と評価に関する研究 (共同研究)
- 2) 日本健康心理学会 児童虐待防止研究部会
- 3) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」健康講座講義と実践 (連続講座)
- 4) 相模原市男女共同参画推進センター「リタイア世代のストップ・ザ認知症」講義と実践
- 5) 千葉県生涯大学校「心の健康：ストレスマネジメント」講義と演習
- 6) メンタルケア学会「ボディ&メンタルヘルス研修講座」講義と演習
- 7) 桜美林大学大学院健康心理学フェア「笑い与健康：ボディ&メンタルづくり」講義と実践

## 1. 研究課題

地域在住後期高齢者におけるレジリエンスに関する研究

## 2. 研究活動の概要

地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンス要因を検討するために、2つの地域において20人の対象者にエピソード・インタビューを行いテーマ分析によりまとめた（桜美林大学大学院老年学研究科博士後期課程第2次試問に提出）。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 小林由美子、杉澤秀博：地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンス要因（投稿準備中）。

### 【学会発表】

- 1) 小林由美子：地域在住後期高齢者における加齢に伴う逆境からの回復プロセス－成長とそ  
のきっかけに着目して－. 老年社会科学36（2），第56回大会報告要旨号：261（2014）。
- 2) Kobayashi Yumiko：Resilience among community-living old-old elderly：Focusing in  
growth. European Health Psychology, 28th Conference of the EHPS Proceedings：79  
（2014）。
- 3) 小林由美子，杉澤秀博：地域在住高齢者における逆境とレジリエンス－健康関連の逆境，評  
価への着目－. 第9回日本応用老年学会抄録集：一般演題7（2014）。

### 【科研費などの助成金】

- 1) 公益在団法人在宅医療助成勇美記念財団2013（平成25）年度助成：小林由美子、杉澤秀博、  
地域在住高齢者における加齢に伴う喪失を原因とする逆境からの回復、レジリエンスへの着  
目、完了。

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者介護現場での笑いの体操の職員への影響
- (2) 健康づくりグループの笑いケア体操実施者の健康評価

## 2. 研究活動の概要

### (1) 認知症高齢者への笑いヨガの効果についての検討

笑いヨガは、笑うために聴力・視力・認知能力を必要としないので、認知症の運動法として簡単に行うことができる。認知症専門のデイサービスで5週間連続笑いヨガを実施し、利用者の変化を観察した。声が出やすくなり、コミュニケーションが活発になり、意欲的になることから、引きこもりの予防、抑うつに効果があると推測できる。また、職員の態度の変化も観察できた。

今後、施設職員が笑いヨガを事業所利用者全員に毎日行い、コントロールは同法人の別の事業所とし、その身体的・心理的効果を測定・検証する。

### (2) 健康づくりグループの笑いケア体操実施者の健康評価

吉野町国民健康保険吉野病院で、COPD患者の呼吸リハビリテーションに「笑いヨガ」を取り入れ、COPD患者のQOL、うつ尺度、不安尺度に及ぼす影響を検討し、DVD教材『自宅で楽息』（日本笑いヨガ協会）を作成した。さらに、健康な人を対象とした『笑いヨガで超健康になる』（マキノ出版）を刊行した。現在は、それらの教材を用い、笑いのセルフケアプログラムを構築した。そのプログラムを健康づくりのグループ（医療福祉生協の班会・JA女性部等）に取り入れ、健康評価を行う。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 特別講演 北海道母性衛生学会 『笑いヨガで心身を鍛えよう』
- 2) 特別講演 鹿児島県農村医学研究会 『笑いは万能薬－笑いヨガで健康なからだづくり』

**【教材作成】**

- 1) 介護予防のDVD 『笑いヨガで超健康になる』（MOOK）マキノ出版
- 2)           〃           『笑いの体操AtoZ』日本笑いヨガ協会
- 3) 翻訳 Certified Laughter Yoga Leader Manual改訂版 LaughterYoga International University
- 4) DVD日本語版教材 『笑いヨガコーチング』 Laughter Yoga International University

**【その他の研究活動】**

- 1) 日本笑い学会 20周年記念事業『新笑い与健康』記念誌執筆
- 2) 東京都地域の底力再生事業 異世代交流と地域ネットワークづくり
- 3) 高齢者の口腔ケアのための笑いの体操プログラム（日本笑いヨガ協会）

## 1. 研究課題

介護予防・地域支え合い事業のアクティビティ・ケアプログラムに関する研究

## 2. 研究活動の概要

昨年度のフィールドワークを継続して実施中。今年度はアクティビティ・プログラムの地域での多様性をさぐるためグループホームでのアクティビティ・プログラムに参加。神奈川県A市にある地域高齢者によるボランティアグループと共にBグループホームでのアクティビティ・プログラムの企画と実施に携わる。

## 3. 研究業績

### 【共訳】

- 1) Stanley Hauerwas (東方敬信監訳 塩谷直也/大森秀子/清水正/山室吉孝/高砂民基/東方和子/清水香基/西谷幸介 共訳) : 「大学のあり方」－諸学の知と神の知 青山学院大学総合研究所叢書 ヨベル Yobel Inc, 東京 (2014)



## 1. 研究課題

- (1) 女性定年退職者の生活と考え方
- (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的な施策

## 2. 研究活動の概要

### (1) 女性定年退職者の生活と考え方

情報収集（セミナー参加）

①第56回日本老年社会科学会

会 場：下呂交流会館

開催日：6月6日、7日、8日

②“シニアの就労を考える”シンポジウム

主 催：シニアセカンドキャリア推進協会

会 場：千代田区立 内幸町ホール

開催日：9月11日

③「日本における超高齢化社会の未来：JASTARデータの国際比較から」

主 催：独立行政法人 経済産業研究所

会 場：虎ノ門ヒルズフォーラム

開催日：12月12日

### (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的な施策

- ・武蔵野市地域包括支援センター運営協議会 委員

## 3. 研究業績

特になし

## 1. 研究課題

地域における認知症予防に関する研究：

- ①認知症の知識を普及させる活動の効果の研究
- ②認知症の人に回想法や傾聴などの非薬物療法を提供する効果についての研究
- ③マクロとミクロとの懸隔に発する研究

## 2. 研究活動の概要

①については、これまで数年に亘って町内会、地域包括支援センター、自治体の要請を受けて、認知症に関する講演会を数多く行ってきた。（平成26年度だけで12件）しかしその講演にどれだけの効果があったかは、講演後に行うアンケートでの「とても役立った」などという主観的な評価でしか知る方法はなかった。それで認知症に関する知識の程度を測定するテストにより、講演前と後との知識の差を検証できるようにする方法を研究した。

②については、9月まで回想法をグループホームで継続して毎週提供した。また有料老人ホームで個人回想法を8回提供した。後者については、生きがい感テストで回想法の前後の違いを明らかにした。

③の意味するところはこうである。厚生労働省の発表によれば、2012年における認知症と軽度認知障害の人の合計は862万人であり、これは国民全体の約7%である。この比率を町内会に当てはめれば、どこの町内会でも数十人程度の認知症と軽度認知障害の人がいるはずである。しかしどこの町内会の役員に尋ねても、せいぜい4、5人程度の数しか挙がらない。これは現在認知症に関する誤解と偏見が行き渡っているため、認知症や軽度認知障害の人は隠れていて、目立たないからである。

認知症の人が地域で穏やかに生活できるためには、「自分は認知症だから、手助けしてください」と言える必要がある。どのようにすればこのような状態になるのか、を研究する。

## 3. 研究業績

### 【論文（共著）】

- 1) 「1研究事例に基づく混合研究法の考察」桜美林大学大学院老年学研究科紀要「老年学雑誌」第4号に掲載

**【学会発表】**

- 1) 「1事例に見る混合研究法の研究デザイン選定に至る過程」日本応用老年学会第9回大会

**【その他の活動】**

- 1) 認知症の知識を地域に広めるために行った講演活動

横浜市港南区の町内会 2回

〃 のコミュニティハウスなど 6回

〃 以外の地域での講演 3回

## 1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する研究
- (2) 活力ある大衆長寿社会の構築に資する公共政策研究
- (3) 健康寿命延伸に資する公益ビジネスモデル政策研究
- (4) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓蒙に資する研究

## 2. 研究活動の概要

- (1) **高齢者の QOL と社会貢献の向上に資する研究**  
産学公民協働型 F/S の推進
- (2) **活力ある大衆長寿社会の構築に資する公共政策研究**  
地域公益活動団体と、地方公共団体との新・連携モデル推進
- (3) **健康寿命延伸に資する公益ビジネス政策研究**  
健康増進産業クラスター形成の推進
- (4) **大衆長寿社会における老年学の普及、啓蒙に資する研究**  
高・大連携によるエイジング論共通科目化の推進

## 3. 研究業績

### 【公共政策プロジェクト】

- 1) 06月～ 認知症カフェ開設コンセプト、プログラミング
- 2) 09月～ 南房総地域生涯教育推進 F/S

### 【講演・セミナー】

- 1) 7月 老年学特論（札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科集中講義）
- 2) 9月 大衆長寿社会に求められるケア・サービスの原理－老年学が繋ぐコミュニティの明日（相模原市高齢者福祉施設協議会）
- 3) 11月 大衆長寿社会に応える、地域経営のあり方（館山のみらいを考える会） 他、多数

### 【その他の研究活動】

- 1) 地方自治体エイジング教育導入に関するヒアリング、意見交換

## 1. 研究課題

定年退職を経験した既婚女性の社会参加

## 2. 研究活動の概要

### ・目的

定年や早期退職制度で退職した既婚女性が、新たな活動の場として社会参加を選択することの意味づけとその形成プロセスを明らかにすること。

### ・調査分析

既婚女性7名に対してインタビューを行い、その内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチで分析した。

### ・分析結果 (<>はカテゴリー, 【】はサブカテゴリー)

- ① 社会参加の促進に寄与している要素として、<地域を意識した参加>（【規範としての活動】【回帰の場所としての活動】で構成）と、<家族関係を意識した参加>（【家族に縛られたくない】）があった。
- ② <家族関係を意識した参加>には、【家族に迷惑をかけない】という、活動を躊躇させる意識が見られた。
- ③ <家族関係を意識した参加>の形成には、現役時代の<伝統的家族関係を意識した就労>が、<地域を意識した参加>の形成には、現役時代の<地域との薄い関わり>が影響していた。

## 3. 研究業績

### 【論文】

- 1) 「定年退職を経験した既婚女性の社会参加の意味づけ」

桜美林大学大学院老年学研究科 老年学雑誌 第5号（2014年度）に掲載される予定

## 1. 研究課題

- (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- (2) 高齢社会における保険会社の役割
- (3) 高齢者の安全に関する研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告

- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実  
査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・某リサーチ会社による、シニアマーケットに関する研究プロジェクトに参画。過去数十年に渡る  
データを基に、高齢者の消費行動を分析・考察
- ・一橋大学・第一生命 産学共同研究会メンバーとして毎月の研究会に参加

### (2) 高齢社会における保険会社の役割

- ・警察政策学会の「超超高齢社会化研究会」に参画
- ・隔月で行われる研究会に参加
- ・日本市民安全学会毎月行われる研究会に参加
- ・市町村・学会等、依頼講演による啓蒙活動

### (3) 高齢者の安全に関する研究

- ・研究会参画等

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 塚原新一, 堀内裕子, 加治佐康代, 對馬友美子  
「シニア層の生活行動の変化を捉える：MCRデータを用いた生活行動時間の変化」  
第9回日本応用老年学会, 神奈川, 2014年10月26日
- 2) 堀内裕子; 「超高齢者における連携事例」; 第11回日本市民安全学会, 浦安, 2014年10月4日

## 【その他の研究活動】

### 1) 講演他

- ①2014年5月20日：某自動車部品会社社員向け講演「ジェロントロジー（老年学）から見るシニア消費とマーケティング視点」
- ②2014年5月22日：マンションコミュニティ研究会「「年をとる」ってどういうこと？  
－高齢者に安全な住まいを考える－」
- ③2014年5月30日：野村証券東京支店顧客向け講演「ジェロントロジー（老年学）を学ぶ」
- ④2014年6月3日：某自動車部品会社社員向け講演「シニアを理解する－からだ－」
- ⑤2014年6月13日：某自動車分解者社員向け講演「データでみる超高齢社会」
- ⑥2014年8月7日：東北大学老年経済学吉田ゼミ講演「ジェロントロジー（老年学）の視点からのシニア消費」
- ⑦2014年8月21日：台湾国泰人寿保険講演「日本の高齢者施設情報」
- ⑧2014年8月22日：台湾保険発展センター「日本の施設評価」
- ⑨2014年9月17日：足立区住区センター従事者向け講演「高齢社会・高齢者を理解する」
- ⑩2014年12月16日：日本経済新聞社新シニアライフデザイン研究会「健康寿命と死の質（QOD）の考え方～パラダイムシフト」モデレーター
- ⑪2015年3月14日：浦安市「介護予防・認知症予防体験フェア2015in浦安」基調講演「老年学をご存知ですか」
- ⑫2015年3月18日：日本経済新聞社新シニアライフデザイン研究会講演「ポテンシャルシニア」の新しいライフデザイン
- ⑬2015年3月23日：日本マーケティング協会JMA基調講演「「シニア5000万人時代のマーケティングを考える」「老年学から見たシニア市場のキャッシュポイント」 パネルディスカッションパネリスト「シニア5000万人時代のマーケティングを考える：シニアマーケティング先行企業の事例紹介」

### 2) 執筆

堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました TECHNOプラス 福祉介護 日本工業出版社

No.55	4月	いまどきのシニアⅢ	－ネットでの買い物にも変化!?!－
No.56	5月	いまどきのシニアⅣ	－シニアの睡眠－
No.57	6月	いまどきのシニアⅤ	－シニアって早起き？夜更かし？－
No.58	7月	いまどきのシニアⅥ	－おしゃれなシニア－
No.59	8月	いまどきのシニアⅦ	－グルメなシニア－
No.60	9月	いまどきのシニアⅧ	－テレビ視聴状況①－
No.61	10月	いまどきのシニアⅨ	－テレビ視聴状況②－
No.62	12月	いまどきのシニアⅩ	－シニアと旅－



- No63 1月 いまどきのシニア X I -シニアと旅2-
- No64 2月 いまどきのシニア X II -人生テーマ-
- No65 3月 いまどきのシニア X III -日頃行っている趣味・活動-

## 1. 研究課題

- (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進
- (2) 看護実践における経験知の集積と分析

## 2. 研究活動の概要

### (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進

11年間にわたり看護（職）と介護（職）の連携促進について研究を継続してきたが、そこから①看護職が医学的知識を高め、優れたケア技術に習熟すること。②看護職が介護職と清拭や食事介助などの日常生活行動ケアを協働すること。③看護・介護職双方が遠慮なく意見を出し合える「環境作り」の重要性の3つが抽出できた。

昨年は、上記の②を探究したいと考え、看護・介護職がともに働く場面を7日間観察・録音し、介護職の連携における役割を分析したいと考えた。今年は昨年と同じ観察・録音データを用いて、看護職に焦点をあて看護の役割を分析しているが、まだ途中であり、今年の学会で報告したい。

### (2) 看護実践事例における経験知の集積と分析

看護実践事例集積研究会（代表：川島みどり日赤看護大学名誉教授）に所属している。専門雑誌（15誌）、学会報告集など事例報告に含まれる「経験知」を精練・集積して、「多くの臨床現場に活用できる看護技術」に技術化し、そして事例ごとに命名して分類する作業をしていくことを目的に2002年5月から継続している。

個票作成を分担し、毎月の研究会でグループに分かれ2次チェックを行い、さらに3次チェックを経て、看護実践事例をウェブ上に公開している。これまで、文部科学省科学研究補助金（研究成果公開促進費を2009年から毎年受けている）。

2007年4月1日に、ホームページを立ち上げた。今年は、2年分（2007年・2008年）の個票を集積し、合計1,010の個票をインターネット上で公開できた。

### 3. 研究業績

#### 【学会発表】

- 1) 中山久美子、宮城恵理子、前田志名子他：臨床での看護実践の現状＜第一報＞－看護系雑誌から集積した1,010事例における看護の対象の傾向から、日本看護技術学会第13回学術集会（京都）

#### 【研究費などの助成金】

- 1) 平成26年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）

#### 【その他の研究活動・社会活動】

- 1) 看護実践事例集積研究会検討メンバー
- 2) いなぎ苑（稲城市の介護老人福祉施設）において評議員
- 3) 介護認定審査会委員（東京都稲城市・世田谷区）
- 4) 東京スピリチュアルケア研究会（三澤久恵代表世話人）

## 1. 研究課題

- (1) 中年期にある人の自己老後像と関連要因の質的研究
- (2) 中年期にある人の自己老後像と関連要因の量的研究
- (3) 中年期にある人の自己老後像と関連要因の混合研究

## 2. 研究活動の概要

### (1) 中年期にある人の自己老後像と向老意欲の質的研究

本研究の目的は、中年期にある人の自己老後像（老後イメージ）を明らかにし、またその関連要因を明らかにすることである。

東京都在住の44歳から56歳の男女を対象として、2012年10月から2013年1月にわたってインタビュー調査を行った。分析にはKJ法を用いた。当初、20名分のデータから中年期にある人の自己老後像の統合を試みたが、複雑な図解となり、統合をさせる事は困難であると判断した。そこで、統合を試みる段階で、いくつかのパターンが見受けられ、それぞれのパターン別に統合し、その差異を明らかにする事からより多くの知見が得られると考えた。見いだされた型は、積極型、反面教師型、堅実型、足踏み型、消極型の5つであった。分析結果からは、中年期の人の自己老後像の関連要因として、高齢者観（高齢者をどのように捉えているか）、自己認知（現在の自己の状況に対する認知）、自己老後像に向かう意欲が示された。

### (2) 中年期にある人の自己老後像と関連要因の量的研究

本研究の目的は、質的研究で示された自己老後像の関連要因を、より多くの人を対象にして明らかにする事である。研究（1）の質的研究で明らかにされた関連要因は、高齢者観、自己認知、自己老後像に向かう意欲（以下、向老意欲と記す）であった。向老意欲は私が造語した言葉であり、新たな概念である。特に、研究（1）では、インタビューの際、自己老後像と向老意欲を一緒に回答している場合が多く、向老意欲を自己老後像に含める形で分析を行ったが、見いだされた5つの型の内、積極型、反面教師型、堅実型、足踏み型からは向老意欲が見いだされ、向老意欲が自己老後像の関連要因である事は明らかである。そこで、本研究では研究（2）の1として、向老意欲に関する尺度の原案作成を試みる。その上で、自己老後像と関連要因と想定される、向老意欲、高齢者観、自己認知との関連を示す。

東京都日野市在住の45歳から55歳800人を対象とした質問紙調査を行った。郵送法による。2013年

12月から2014年1月にかけて行い、回収された質問紙は124票であった。

第1に、研究（1）で語られた内容を元に、向老意欲に関する尺度原案作成を試み、その妥当性と信頼性を検討した。

第2に、自己老後像と向老意欲、高齢者観、自己認知、属性について相関分析を行った結果、自己老後像の関連要因として、向老意欲、高齢者観、自己認知、性別が示された。

### **（3）中年期にある人の自己老後像と関連要因の混合研究**

本研究の目的は、研究（1）と研究（2）の結果を元に、中年期にある人の高齢者観と関連要因のパターンから類型を試みる事である。さらに、研究（1）では曖昧であるとされた自己老後像について言及する。

研究（1）では、自己老後像と高齢者観、自己認知の関連のパターンから積極型、反面教師型、堅実型、足踏み型、消極型の5つの型が示された。研究（2）では、自己老後像と向老意欲、高齢者観、自己認知の関連が示された。そこで、クラスタ分析を行い、見いだされた5つのクラスタと研究（1）で示された5つの型の照合を行った。さらに見いだされたクラスタから自己老後像を検討した。

見いだされた5つのクラスタと研究（1）で示された5つの型が適合した。これにより、中年期にある人の自己老後像と関連要因とのパターンには5つの型がある事が示された。自己老後像には変化・挑戦パターン、維持パターン、矛盾パターンの3つのパターンが見いだされた。

## **3. 研究業績**

### **【論文】**

- 1) 松永博子, 直井道子: 中年期の人の高齢者観が自己老後像に与える影響, 江戸川学園人間科学研究所紀要, 第31号, 2015. (2015年5月掲載予定)

### **【学会発表】**

- 1) 松永博子, 直井道子: 中年期の人の高齢者観が自己老後像に与える影響; 消極型と反面教師型との対比から, 第56回, 日本老年社会科学, 岐阜, 2014年6月

## 1. 研究課題

在宅介護中高年者の体力や身体機能が介護の負担感に与える影響

## 2. 研究活動の概要

在宅での主たる介護者は配偶者が多く、老老介護世帯が多い。介護生活を継続していくためには身体的、心理的、社会的な要素が重要といわれている。そこで在宅介護をしている40歳以上の中高年者31名の体力の1指標である体重支持指数が介護負担感と関係があるか調査した。

その結果、セルフケアを介護する負担感は、体重支持指数が低いほど増加する傾向がみられた。今後は、対象数を増やし再度分析してみる必要があることと、調査項目の洗い直し、介護負担感自体の枠組みについてなど再検討していく予定である。

## 3. 研究業績

### 【学会発表】

- 1) 在宅中高年介護者の体重支持数と介護負担感との関連について、第33回関東甲信越ブロック理学療法士学会、千葉、2014年10月

### 【その他】

- 1) 伊藤隆夫、齋藤秀之、有馬慶美編集、訪問理学療法ガイド（分担執筆）、文光堂、東京、702-709、2014
- 2) 「高齢者の理学療法」、千葉県理学療法士会学術局主催 新人教育プログラム研修会、2014年7月
- 3) 「介護者のための運動学」、すずらん福祉学院実務者研修特別講義、2014年6・10月、2015年2月
- 4) 「高齢社会と理学療法」、高校1年生向けキャリアガイダンスセミナー、2014年9月（千葉県立匝瑳高等学校）、10月（千葉県立多古高等学校）、11月（県立佐倉南高等学校）
- 5) 千葉県富里市 介護保険審査会委員
- 6) 千葉県救護施設猿田荘 機能訓練相談員

## 1. 研究課題

地域包括支援センターにおいて総合相談支援業務を担当する社会福祉士の役割

## 2. 研究活動の概要

地域包括支援センターの社会福祉士5人に対する質的調査、および神奈川県内の地域包括支援センター（327カ所）の社会福祉士に対する量的調査に基づき、センターで総合相談支援業務に従事する社会福祉士の役割を分析した。この研究の成果を、神奈川県立保健福祉大学保健福祉学研究科社会福祉領域の修士論文としてまとめた。次年度に、学会誌などへの投稿を予定している。

## 3. 研究業績

なし



平成26年度研究活動報告

---

発行：桜美林大学加齢・発達研究所  
〒194-0294  
東京都町田市常盤町3758  
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：平成27年3月31日

---

印刷：(有)片野印刷